ISSN 2423-9763

東 京 国 際 大 学 論 叢

人 文 ・ 社 会 学 研 究

第７号

論　　文

「自由殺し liberticide」の告発者
——パーシー・ビッシュ・シェリーは『神学・政治論』を
どう受け止めたか—— …… 吉田　量彦…… 1

「天下篇」荘子に後接する郭象「荘子序」…… 水野　厚志…… 17

経営学ケースメソッド実践者の考える内省とは
——日本語教育版ケースメソッドの開発を目指して——
…… アドゥアヨム・アヘゴ　希佳子…… 33

２０２２

東 京 国 際 大 学 論 叢

人 文 ・ 社 会 学 研 究

第 7 号

「自由殺し liberticide」の告発者
——パーシー・ビッシュ・シェリーは『神学・政治論』をどう受け止めたか——[1)]

吉　田　量　彦

The Complainant Against Liberticide
How did *Tractatus Theologico-politicus* Interest the English Poet Percy Bysshe Shelley?

YOSHIDA, Kazuhiko

Abstract[2)]

It is known that in the latter 1810s, Percy Bysshe Shelley was busy translating *Tractatus theologico-politicus* (1670), a then-controversial work by Baruch Spinoza (1632–1677), into English. What made him do it? The obvious assumption, that the so-called pantheism controversy and the subsequent Spinoza renaissance since the 1780s in Germany had aroused his interest in Spinoza, turns out to be less plausible on closer inspection. This is because this dispute caused lively discussions about Spinoza and his thoughts not only in the German-speaking countries, but also in other Western European countries. From the beginning, it revolved exclusively around Spinoza's metaphysical worldview, which is mainly found in the first two parts of his main philosophical work, *Ethica* (1677). In contrast, Spinoza's anthropological, ethical-practical, and, above all, theological-political thoughts were almost unmentioned according to a tacit agreement among the participants in the discussion. Since Shelley's translation is considered lost to this day, the author is concentrating on two attempts: First, he tries to chronically reconstruct the more detailed processes of Percy Bysshe Shelley's translation work from the few materials left behind (including letters and entries in Mary Wollstonecraft Shelley's diary). It turns out that, in spite of several obstacles, Percy was by and large regularly and diligently engaged in the translation and Mary provided him with constant support in various ways. Second, the author tries to point out an unmistakable content-related feature in the *Tractatus* that could have strongly motivated Shelley to pursue this translation: In this work, Spinoza

makes a clear plea for freedom of opinion, speech, and freedom of the press (libertas philosophandi) and thereby systematically and uncompromisingly criticizes a maneuver of repression that was common across Europe at the time; Shelley vigorously refers to this in his poems several times as liberticide.

Keywords: liberticide, Percy Bysshe Shelley, Mary Shelley, Baruch Spinoza, Tractatus theologico-politicus

目　次

1. はじめに――問題の所在
2. 汎神論論争とは何だったのか
3. なぜ『神学・政治論』は汎神論論争の話題に上らなかったのか
4. なぜ『神学・政治論』がシェリーを引きつけたのか
5. おわりに――メアリー・シェリーの証言から

1. はじめに――問題の所在

2020年の2月下旬，新型コロナウィルス関連の記事で新聞各紙が徐々ににぎわい始めていた頃，日本シェリー研究センターの佐々木真理氏（武蔵野大学）から筆者の下に一通のメールが届いた。その年の暮れに開催される2020年度年次総会のシンポジウムに，筆者をパネリストの一人として招きたいというのである。

日本シェリー研究センターは，イギリス・ロマン派の詩人パーシー・ビッシュ・シェリー（Percy Bysshe Shelley: 1792–1822）と，その妻で『フランケンシュタイン』の著者メアリー・ウルストンクラフト・シェリー（Mary Wollstonecraft Shelley: 1797–1851）を研究・顕彰する学術団体だという。正直に言ってこの突然の申し出にはとても驚いた。筆者は英語・英文学を研究対象としたことがこれまでの人生の中でただの一度もなく，詩人のシェリーについては今から30数年前，大学一年次に履修した英文学の授業で，一編のソネットを読まされた記憶しかない。メアリー・シェリーにいたっては『フランケンシュタイン』さえ読んでいない有様である。英文学の学会に招かれる心当たりなど微塵もない。

その後佐々木氏から詳しい理由をうかがって，ようやく「ああ，そういうことか」と腑に落ちた。なんでもシェリー（以下，特に断らない限りパーシー・ビッシュを指すものとする）は，その短い生涯の晩年，具体的には1810年代の後半から1820年代にかけて，あの『神学・政治論*Tractatus theologico-politicus*』の英訳を試みていたというのである。

「あの」と言われても困るかもしれないが，『神学・政治論』とは，17世紀のオランダに生きた哲学者スピノザ（Benedictus de Spinoza: 1632–1677）が1670年に匿名で刊行した著作である。ホッブズ『リヴァイアサン』やロック『統治二論』といった同じ17世紀の古典と比べ，一般的な知名度こそ高くはないものの，近代の宗教・政治哲学の歩みを考える上では両者に劣らない重要性を秘めた作品であり，日本語にも2度訳されている。最初の邦訳は1944年に岩波文庫から刊行されたもので，訳文を手がけたのは，のちにスピノザの著作のほとんどを単独で邦訳することになる畠中尚志（1899–1980）であった。[3] その畠中訳からちょうど70年後の2014年に，光文社古典新訳文庫から2度目の邦訳が刊行された。この時翻訳にあたったのが吉田量彦（1971–），と他人事のよ

うに書いたが，つまり筆者である。[4] そういうつながりで呼ばれたらしい。

招かれた経緯は理解できたが，お話をうかがううちに別の疑問が生じてきた。シェリーの目に留まったのは，なぜ『エチカ』ではなく『神学・政治論』だったのか，という疑問である。これも多少の説明が必要だろう。

佐々木氏のご教示によると，シェリーは『神学・政治論』の英訳にとりかかる数年前の1813年1月，「スピノザの著作集を注文」しているという。[5] 筆者は当初ごく単純に，1802年から1803年にかけて隣国ドイツのイェナで刊行されたスピノザ著作集（以下，仮に編者の名前をとり「パウルス版」と呼んでおく）[6] を注文したのだろうと推理し，シンポジウムの梗概にもそう書いた（が，実際には少しだけ違っていた）。[7] 当時もっとも入手しやすかったと思われるのは，刊行時期から見ても収録作品の網羅性から見ても，間違いなくこのパウルス版だからである。

パウルス版スピノザ著作集の刊行は，画期的な出来事であった。これ以前にスピノザの著作に触れようとすれば，ひとはとっくの昔に絶版希少本となり，しかもその大部分が発禁処分を食らっている，一連の著作群を個別に探して買い集めるほかなかったからである。具体的には何よりもまず，スピノザの没した1677年の年末にラテン語・オランダ語訳2種類の版で刊行され，翌年直ちに禁書となった『遺稿集Opera Posthuma/ Nagelate Schriften』を見つけてくる必要がある。しかしこれは文字通りの遺稿集，つまりスピノザが死去した1677年2月21日の時点で未刊だった著作を集めた書物であるため，たとえば1670年に匿名とはいえ一度刊行され，そして1674年7月に禁書となった『神学・政治論』は含まれていない。含まれていないということは，これはこれで別に見つけてこなければ入手できないのである。

よほどの興味関心と，よほどの忍耐力を併せ持った人でなければ，普通そういう骨の折れる文献収集は試みないし，仮に試みたとしても何しろ相手は名うての発禁本だから，運よく見つけられるとは限らない。この結果，18世紀も後半に差しかかる頃には，スピノザの思想を原典にあたって正確に理解しうる境遇にある人は，ヨーロッパ全域で考えても希少となっていたようである。ひとはたとえば，ベール『歴史批評辞典』（初版1696）の長文ながら色々と不備の目立つ項目「スピノザ」などに頼りつつ，この人物の思想らしきものについて想像力を働かせる他なかった。パウルス版スピノザ著作集，つまり世界初のスピノザ全集は，十分に信頼できない二次資料によってスピノザの人物像および思想が奇怪にゆがんだ形で伝えられていき，そして伝えられた先でさらに信頼できない二次資料を生み出していくという，この厄介な悪循環を断ち切るための橋頭堡の役割を果たすことになったのである。

このパウルス版著作集の刊行は，さらにそれに先立つ1780年代以降のドイツ語圏で，いわゆる汎神論論争を通じ，スピノザ哲学に対する再注目，再評価の機運が高まったことの結果に他ならない。汎神論論争は当時のドイツ語圏の文学や思想，わけてもドイツ・ロマン派のそれに大きな影響を及ぼしており，そのドイツ・ロマン派と英語圏のロマン派の間にもどうやら濃密な摂取・影響関係があったようなので，シェリーが『神学・政治論』に目を付けたのも，一見すると当然の成り行きのように見えるかもしれない。

ところが，残念ながら話はそう簡単にはまとまらない。というのも後述するように，汎神論論争でスピノザに寄せられるようになった関心は哲学上の主著『エチカ』の，しかもかなり限られた論題に集中するばかりで，『神学・政治論』が話題に上ることは皆無に近かったからである。『神学・政治論』がパウルス版に収録されたのは，可能な限り網羅的であろうとする編集方針（cf. “Opera *supersunt omnia*”!）の結果にすぎず，この著作に当時のドイツ語圏で特に論争上の関心が集まっていたからというわけではない。同じことを反対から表現するなら，仮にシェリーのスピノザへ

の関心が汎神論論争の何らかの波及効果によってもたらされたとすれば，その関心が最初に向かうのは普通に考えれば『エチカ』であり，『神学・政治論』ではなかったはずなのだ。

もちろん，シェリーがもう少し生きながらえていたら，その関心は結局のところ『エチカ』にも向けられていたかもしれない。『神学・政治論』を片付けた彼が，今度は『エチカ』の翻訳に乗り出すことは，『エチカ』の英訳も当時存在していなかったことを考え合わせるなら，[8] 可能性としては十分ありえただろう。しかしそうした想像以上に重んじなければならないのは，生き急いでいたとしか言いようがないほど鮮烈で短い人生の中で，彼が最初（で最後）に取り組んだスピノザの著作が『エチカ』ではなく『神学・政治論』であったという，厳然たる事実である。そこには明らかに（どの程度自覚的だったかはともかく）シェリー自身の選択が働いている。それでは改めて問わなければならないが，シェリーにそのような選択を促した要因は，一体どのようなものだったのだろうか。

この報告では，まず汎神論論争の概略を紹介した後（第2節），当時のドイツ語圏の教養市民層を取り巻いていた政治的・社会的環境を，同時代の仏語圏および英語圏のそれと対比しつつ，紙幅の許す限りで明らかにしてみたい（第3節）。私見では，『神学・政治論』を何らかの政治哲学的関心のもとに取り上げることを可能にするような条件が，前者ではまったく整っていなかったのに対し，後者ではまがりなりにも整っていたように思われる。さらに本報告では，そうした条件のみならず，『神学・政治論』で展開されたスピノザの思想そのものに，シェリーが特に引き付けられたと思われる内在的特徴が見出されないかどうか検討してみたい（第4節）。結論から言えば，筆者は，そうした特徴は確かに見出されると考えている。シェリーの印象的な言葉を借りるなら，『神学・政治論』は，西洋近代哲学史上これ以上ないくらい徹底した形で「自由殺しliberticide」の愚かさを解き明かした著作だからである。

2. 汎神論論争とは何だったのか

いわゆる汎神論論争Pantheismusstreitを見渡しにくくしている最大の原因は，論争が進むにつれて関係者が増殖していくことである。したがって，この論争の大枠を理解するには，まず無駄に多い登場人物を削減し，その発端を作った3人，つまりレッシング（Gotthold Ephraim Lessing: 1729–1781），メンデルスゾーン（Moses Mendelssohn: 1729–1786），ヤコービ（Friedrich Heinrich Jacobi: 1743–1819）まで戻って考えてみるのが一番手っ取り早い。

ただし3人まで戻るということは，結局は1人に戻ることを意味する。というのも，今あげた3人のうちレッシングは，論争のきっかけを作った人物ではあるものの，論争開始時点ですでに死んでいる（というか，彼が亡くなったことがすべての発端である）し，メンデルスゾーンも論争開始後ほどなく死ぬからである。論争の中心人物は，したがって，最後に残ったヤコービということになる。論争の中心となったテクスト『スピノザの学説に関する書簡』（1785）も，前半部の所々にメンデルスゾーンの書簡からの写しをふくむものの，大部分は（冒頭で復元されている生前のレッシングとヤコービの対話もふくめて）ヤコービの筆から成っている。[9]

レッシングが亡くなってからしばらくして，ヤコービは自他ともに認めるレッシングの無二の親友メンデルスゾーンと文通を始め，生前のレッシングがスピノザとその思想に多大な共感を示していたことを明かす。[10] これに対し，同じユダヤ人思想家として「スピノザ主義者あるいは汎神論者Spinozist oder Pantheist」というレッテルの危険性を知りすぎるほど知っていたメンデルスゾーンは，レッシングの放言癖を強調することで事態の無害化を図ろうとする。こうして，よ

くも悪くも空気を読まず，真実を明らかにしようと望むヤコービと，よくも悪くも空気に敏感で，頑ななまでに亡き友の名誉（？）を守ろうとするメンデルスゾーンの間に，「スピノザ主義者であるとはどういうことか」をめぐり，微妙にかみ合わないやり取りが始まるのである。

当然ながら，書簡を往復させるうち，話題はスピノザの哲学の中身におよぶ。メンデルスゾーンのスピノザ理解は，少なくともヤコービの目線からすると，かなり粗雑な水準にとどまっていた。その認識のすり合わせを図るべく，ヤコービは自らスピノザの「学説」を，しかも2度にわたって要約してみせる。[11]

やがて両者それぞれの体調不良も重なり，文通が滞り始めたため，ヤコービはこれまでのメンデルスゾーンとのやり取りを「公表しようという考え」を抱くようになる。[12] メンデルスゾーンはメンデルスゾーンで同じことを考えており，ヤコービに先立って刊行した著作（『朝の時間 Morgenstunden』1785年8月）の中で自らの立場を明らかにしたため，ヤコービも翌月刊行に踏み切る。これが『スピノザの学説に関する書簡』（第1版1785年9月，正式名称は『モーゼス・メンデルスゾーン氏に宛てたいくつかの書簡におけるスピノザの学説についてÜber die Lehre des Spinoza in Briefen an den Herrn Moses Mendelssohn』だが，以下『スピノザ書簡』と略称）である。

両著作の刊行によって，論争はいわば野に放たれる。これに伴い，論点も論争開始当初の話題，つまり「レッシングはどのような意味でスピノザ主義者であったか・なかったか」という（ヤコービはともかく，メンデルスゾーンにとっては文字通りの死活問題となった）話題を離れ，同時代のドイツ語圏の知識人たちを巻き込んだ，より普遍性の高い話題へと移行していくことになる。それは「そもそもスピノザの哲学とはどのような哲学なのか」という話題であり，さらに一歩進めるなら「理性を拠り所とする哲学は，本当に，突き詰めていくと必然的にスピノザと同じ結論，つまりヤコービがそう呼ぶところの無神論に行き着くのか」という話題である。[13]

既に述べた通り，ヤコービは『スピノザ書簡』にまとめられたスピノザの学説の丹念な（ただし後述するように，取り上げる論題に偏向が見られる）要約と，その内容に対する警戒感あふれるコメントにより，[14] 論争の中心人物となる。ヤコービから見ると，スピノザの哲学は超越的人格神を否定し，神を自然のメカニズムに内在＝埋没させる「汎神論」あるいは「無神論」ということになるが，しかしそれで話は終わらない。彼はさらに進んで，こうしたスピノザの哲学の「論駁」が不可能であることを強調する。理性の思弁・立証能力に依拠するあらゆる哲学は，それが首尾一貫したものであればあるほど，望んでいようといまいとスピノザの堅牢な思弁を後追い的に確認するほかなく，結局はスピノザと同じ境地に至ることになる。ヤコービにとってスピノザの哲学は究極の哲学であり，その並外れた吸引力から逃れるには，自らの生の究極の支えとなるものを思弁的な論証・反証の対象とならない確信Glaubeに求めるという，彼の言う非哲学Unphilosophieの立場に身を置くしかないとされる。[15]

しかし汎神論論争に関与した人の多くは，ヤコービのこうした警告よりも，彼が要約的に紹介したスピノザの哲学そのものに関心を向けた。たとえばドイツ・ロマン主義の重要な先駆者の一人とされるヘルダー（Johann Gottfried Herder: 1744–1803）は，無神論どころか，現実世界の万物に神の活力を見出す「神すなわち自然Deus sive/seu Natura」の世界観をスピノザの哲学から学んだと考え，自著の中で積極的にスピノザの顕彰を試みた。[16] ヘルダーから一時期大きな影響を受けたゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe: 1749–1832）も，おおむねこの路線でスピノザへの傾倒を示していると言える。[17] こうして，それまで「ひとびとからいつでも死んだ犬のように語られて」[18] いたとされるスピノザと，その思想に対する評価は，ドイツ語圏の論壇では1780年代を境にして大きく塗り替えられることになったのである。

3. なぜ『神学・政治論』は汎神論論争の話題に上らなかったのか

前節では，いわゆる汎神論論争の推移とともに，スピノザとその思想らしきものが，ドイツ語圏で曲がりなりにも受容されていく過程を確認してきた。「思想らしきもの」「曲がりなりにも」という，二重にぼやけた言い方をしたのには理由がある。第１節でも述べたように，実はそれは，スピノザの遺したいくつかの著作の中でも，ほぼ『エチカ』に限られた受容だったからである。それも『エチカ』で展開されたスピノザの思想全体に満遍なく関心が寄せられたわけではなく，汎神論論争で盛んに論じられたのは，ほぼ『エチカ』第1部の形而上学的世界観をめぐる話題に限られていた。

スピノザが自ら「エチカ」と名付けた以上，[19]『エチカ』は当然最終的には倫理学（エチカ），つまり人間の生き方に関する哲学的考察に向かうはずであるし，『エチカ』を頭から読んでいけば分かるように，実際向かっている。にもかかわらず，汎神論論争は，そこの話題にほぼ全くと言っていいほど踏み込まない。妙な言い方になってしまうが，それは『エチカ』を倫理学（エチカ）扱いすることなく進められた，その点では非常に特異な論争だったのである。

こうした偏向のきっかけは，『スピノザ書簡』でヤコービが提示した「要約」の中に既に見られる。前述の通り，ヤコービはこの著作で，スピノザの「学説」の要約的叙述を「第一の叙述」「第二の叙述」の2度にわたって試みているが，『エチカ』第3部以後の内容を示唆していると明確に判別できる記述は，「第一の叙述」の中でコナートゥス（神＝実体の様態としての個物がもつ，自らの存在に固執しようとする力）に言及した箇所以外に見当たらない。[20]

ヤコービはこの他にも，本人にどれだけ自覚があったかは分からないが，議論の方向性をあらかじめ誘導するような記述を残している。たとえば『スピノザ書簡』刊行の動機を「いかなる点において私がスピノザの味方をしたのかを知ってもらうことが，また議論されたことは，ひたすら思弁哲学に対する思弁哲学，より正しく言えば，純粋な形而上学に対する純粋な形而上学であったということ［を知ってもらうこと］が私にとってきわめて重要でした」と説明している箇所がある。[21] これは明らかに，何かに対して予防線を張った書き方である。ヤコービのスピノザ論が，仮に「思弁哲学に対する思弁哲学」「純粋な形而上学に対する純粋な形而上学」をはみ出るようなものだと世間に思われたら，言い換えれば「思弁哲学」「純粋な形而上学」以外の所で「スピノザの味方をした」ものだと世間に思われたら，一体何がどう困るというのだろうか。

『エチカ』でさえこのような選択的受容に甘んじていた事情を考え合わせるなら，汎神論論争で『エチカ』以外のスピノザの著作，特に『神学･政治論』がほとんど言及の対象とならなかったのも，さほど不思議ではないかもしれない。自覚の程度に個人差こそあれ，最終的には論争に関わった誰もが，少なくとも暗黙裡には，『エチカ』をつついて倫理学（エチカ）を出すのを恐れていたのと同じくらい『エチカ』をつついて『神学・政治論』を出すのを恐れていたのである。

逆に言えば，『神学・政治論』という著作自体は意外と広く知られていたと推察される。少なくとも，スピノザが匿名で刊行したそういう表題の著作が存在するという事実は，汎神論論争の関係者たちには広く知られていた。例えばメンデルスゾーンは，接触を図ってきたヤコービへの最初の返信の中で，「スピノザの体系といっても，どの体系のことを言っているのか。『神学・政治論』のものか，『デカルトの哲学原理』のものか，ローデウェイク・マイエルがスピノザの死後，スピノザの名において広めた［『エチカ』を含む『遺稿集』の］体系なのか」と問い返している。[22] そしてそこに一種のはぐらかしを読み取ったヤコービも「あなたがなぜ『遺稿集』に対抗するため『神

学・政治論』を何としても持ち出そうとするのか理解できません。『神学・政治論』がスピノザの学問体系に関して含んでいるものと彼の遺された作品［＝『遺稿集』特に『エチカ』で展開された思想］は完全に一致します」[23] と返しているから，間違いなく『神学・政治論』の内容を，それも『エチカ』の思想との連続性を断言できる程度には把握していたはずである。[24] そしてそれにもかかわらず，メンデルスゾーンもヤコービも，『神学・政治論』とそこで展開された思想に積極的に言及しようとはしていない。

そうした汎神論論争の登場人物たちの中で，例外的に少しだけ，しかも肯定的な文脈で『神学・政治論』に言及しているのはヘルダーである。彼は『神』の導入部で，自分自身の思想を仮託した登場人物の一人に「いまこの時代にスピノザの『神学・政治論』に注解をつけて出版してくれたらよいのですがね」と語らせ，しかも「寛容という点では，私たちの国家の本性は，スピノザがかつて［『神学・政治論』後半部で］おおかたの憎悪を招きながら指ししめした道以外にはほとんど進みようがありません」という，スピノザの宗教・政治思想にかなり肩入れした記述すら残している。[25] しかし本論がいよいよ始まると，ヘルダー（の思想を代弁する人物）は『神学･政治論』を「初期のたんなる時務的な著作」という扱いで『エチカ』の解釈から切り離してしまい，それ以上ふれようとしない。スピノザのもう一冊の政治哲学的著作『政治論*Tractatus politicus*』（1677，岩波文庫の邦訳名は『国家論』）に至っては，他の著作と一からげに「断片」の一言で切り捨てられている。[26] 論旨が右往左往した挙句，更新の途切れたブログのように断絶する『知性改善論*Tractatus de intellectus emendatione*』（初期著作なのは間違いないが，成立年代については諸説ある）をそう呼ぶのは仕方ないとしても，当初の執筆構想にあったほとんどの内容を書ききり，[27] 後はまとめにかかるという所でスピノザの命が尽きた絶筆『政治論』を「断片」として黙殺してしまうのは，この著作に対するかなり不当な扱いと言うほかない。

このように，1780年代に汎神論論争を通じて芽生えたスピノザへの関心は，スピノザの形而上学的世界観への関心に尽きており，スピノザの思想の他の側面，とりわけ『神学・政治論』に代表される政治思想への関心には直接つながっていなかった。それは決して，論者たちがスピノザの政治思想に実際に無関心だったという意味ではない。関心は芽生えていても，うかつに本格的な論争の対象として取り上げることが忌避される，そういう空気のようなものが当時のドイツ語圏にはまだ根強く残っていたという意味である。

17世紀後半という，周辺諸国と比べても比較的早い時期に流布し始め，その後のドイツ語圏にしつこく残り続けるスピノザ憎悪の淵源となった著作は，実は『エチカ』ではなくむしろ『神学・政治論』であったという指摘が行われている。[28] そう言われてみると，『神学・政治論』刊行のわずか数ヶ月後（1670年春）に自らの講義でこの著作を取り上げ，伝わっている限りでは欧州全域で最も早い公の場での批判を行ってみせたのも，ドイツ人であった。ライプニッツの大学時代の指導教員としても知られている，ライプツィヒ大学のヤーコプ・トマジウス（Jakob Thomasius: 1622–1684）である。[29]

啓蒙主義を旗印に掲げた思想家たちが，当初ヨーロッパ諸国のほぼ全域で過酷な迫害を経験しなければならなかったのは周知のことだが，ドイツ語圏ではそうした迫害が18世紀中盤から後半という，いわゆる後期啓蒙Spätaufklärungの時期に入ってもまだ起きていたことが記録されている。もちろんこの時期には，迫害といっても「火あぶりにされるわけではなく，投獄も比較的稀になっていた」が，中には逸脱者と見なされ失業し，どこに転居しても嫌がらせの放火や窃盗に繰り返し痛めつけられ，貧困のうちに窮死を余儀なくされた人物もいたという。[30] こうしたごく近い時代になっても起き続けていた迫害のことは，汎神論論争の関係者たちにも集合記憶として共

有されていたと思われる。スピノザの思想を受容する上で『神学・政治論』をいわばまたぎ越そうとするこうした傾向は，続く1790年代，フランス革命に触発されてドイツ語圏の知識人たちがにわかに政治づき始めた後も（むしろ政治づき始めたからこそ，かもしれないが）基本的に変わらない。[31]

同時代の啓蒙主義の思想家でも，たとえばフランスのヴォルテール（Voltaire: 1694–1778）などがそれなりの非難を浴びながらも諸国の宮廷やサロンで一定の地位を確立し，特にプロイセン王フリードリヒ2世（1712–1786）などの「啓蒙専制君主」たちと気持ち悪いくらい親しく交流するに至っていたのに対し，そのフリードリヒのお膝元（もちろん，彼がドイツ語圏全域を政治的に支配していたわけではないが）のドイツ語圏では，どうしてここまで啓蒙主義が「やられ放題」だったのだろうか。もちろん一枚岩ではない，さまざまな要因がそこには絡んでいたと思われるが，中でもエリアス（Norbert Elias: 1897–1990）を始めとするヨーロッパ文化史方面の研究者たちに繰り返し指摘されているのは，汎神論論争の主役でもあった18世紀ドイツ語圏の知識人たちが，諸外国，特にフランスと比べて，社会の中間層としては極めて脆弱な地位に甘んじていたという事実である。[32]「民衆より上位のエリートだが，宮廷貴族の目線からは二級の人間」であった彼らには，[33] ゲーテのような例外中の例外を除き，政治的決定にほんのわずかでも関与しうるような地位に上昇する機会はほぼ完全に閉ざされていたという。こうした中間層としてのドイツ語圏の知識階層は，その上層とも下層とも隔絶され，しかも神聖ローマ帝国内の大小さまざまな領邦国家群のあちこちに散在し，孤立していたという意味では「例えばこれに対応するフランスの知識階層と比べて，またフランスとドイツのいわば中間的位置を占めていたと思われるイギリスの知識階層と比べてさえ，より純粋に，そしてはるかに特異的に中間層的であった」とされる。[34] つまり早くから国内の集権化によって絶対王制が確立され，地方領主としての実権を奪われた貴族たちが唯一の政治的・文化的中心としてのパリの宮廷に集まるようになり，「唯一絶対の王」と「それ以外の有象無象」という形で身分上の境界線が引き直されつつあったフランスなどの方が，知識階層の上層身分との接触や交流ははるかに容易になっていたというのである。[35] これに加えて，ドイツ語圏の支配者層に根強かったフランスの宮廷文化への猛烈な傾倒と，これに対応したドイツ語圏の文化全般への猛烈な蔑視も，ドイツ語圏における知識人たちの社会的上昇や政治参加をさらに困難なものにしていたという。[36]

4. なぜ『神学・政治論』がシェリーを引きつけたのか

これまで明らかにしてきたように，シェリーが『神学・政治論』に関心を寄せることになった経緯に，汎神論論争の影響はほぼ全くないと考えてよい。だとするとシェリーを『神学・政治論』に引きつけた原因は，この著作に盛り込まれたスピノザの思想そのものにあったと考えるしかなさそうである。[37] では，具体的にスピノザの何が彼を引きつけたのだろうか。

英語圏の文学や思想に疎いまま無駄に年齢を重ねてしまった筆者は，今回の依頼を受けた時点で，シェリーの詩をたった一つしか知らなかった。冒頭で述べた英文学の授業で教わったソネット「1819年のイングランド」がそれである。1819年8月にマンチェスターで起きた大規模な民衆弾圧事件をうたった，いくつかの詩の中の一編だという。改めて読み返してみると，大学の一年次，18歳の秋に初めて読んだ時と同じく，何かやたらと怒り狂った詩という印象を受ける。[38]

England in 1819

An old, mad, blind, despised, and dying king,—
Princes, the dregs of their dull race, who flow
Through public scorn, —mud from a muddy spring,—
Rulers who neither see, nor feel, nor know,
But leech-like to their fainting country cling,
Till they drop, blind in blood, without a blow,—
A people starved and stabbed in the untilled field,—
An army which liberticide and prey
Makes as a two-edged sword to all who wield,—
Golden and sanguine laws which tempt and slay;
Religion Christless, Godless, a book sealed;
A Senate, —Time's worst statute, unrepealed,—
Are graves from which a glorious Phantom may
Burst, to illumine our tempestuous day.

1819年のイングランド

老いぼれて，狂っていて，盲目で，だれからも見下された死にかけの国王—
王子たち，奴らは愚鈍な血筋の残りかす，みんなの嘲りのただ中を
流れていく—泥の泉から湧き出る泥のような連中—
支配者たち，奴らは見ようとも感じようとも知ろうともせず，
みずからの弱った祖国にただ蛭のようにしがみつき，
やがて叩かれもしないのに，血に酔いつぶれて，ぽろりと落ちる—
民衆は飢え，耕されることのない大地に縫い留められ—
自由殺しと略奪を行う軍隊は
それを振り回す誰にとっても両刃の剣となる—
金と血の色をおびたさまざまな法律が，ひとを惑わしたり殺したり，
キリストも神もいない宗教，封印されて開けない本，
老いぼれ議会—時が遺した最悪のしきたり，一向に廃されない—
これらはみな墓なのだ—やがてここから，ひとつの輝かしい亡霊が
はじけ出るだろう—ぼくらの荒れ狂った時代を照らすために。

（原文イタリック，訳文下線部ともに強調 吉田）

この中に「自由殺しと略奪を行う軍隊An army which［makes］liberticide and prey」という一節がある。[39]「自由殺しliberticide」という珍しい単語は，当初シェリーの造語かと思ったし，実際そう書いてある文献も存在するのだが，[40] オックスフォード英語辞典（オンライン版）によると「18世紀後半，フランス語から入ってきた言葉」だという。ただ，どうやらフランス語での用例もフランス革命以前には遡れないようなので，まだ新語に近い言葉であったことは間違いない。[41]

スピノザの『神学・政治論』を開くと，シェリーほどいきり立った口調ではないにせよ，この著作もまたある種の「自由殺し」を告発する書物としての性格を濃厚に宿していることが分かるだろう。あえて「読むと」ではなく「開くと」としたのは，本文を読み始めるまでもなく，ある程度注意深い読者（シェリーも恐らくそうであったと思われる）なら，タイトルページを開いた瞬間にそれに気づかされるはずだからである。

俗に『神学･政治論』と称されるこの書物に，スピノザが付けた正式名称は，実はもう少し長い。そして『エチカ』を「倫理学（エチカ）」と名付けた一件からも明らかなように，スピノザは（少なくとも自分で名付けたことが判明している著作に関しては）看板に嘘偽りを書かない人であった。言い換えれば，著作の中で自分が一番論じたいことを，最初から一切包み隠さず明らかにしておくタイプの書き手であった。[42]

神学・政治論

本書は，
哲学する自由を認めても道徳心や国の平和は損なわれないどころではなく，
むしろこの自由を踏みにじれば国の平和や道徳心も必ず損なわれてしまう，
ということを示したさまざまな論考からできている[43]

以前にも別稿で指摘したが，[44] 哲学する自由（libertas philosophandi：ここでは思想・言論・表現の自由という理解で大過ない）を擁護するために，ここでスピノザはかなり「攻めた」論法を採用している。「哲学する自由を認めても道徳心や国の平和は損なわれない」と言えば，哲学する自由は道徳心や治安を傷つけないもの，つまり国家や社会にとって無害なものだから認めてほしいという論法になるし，実際スピノザはそれも否定しない。しかしここで彼が最終的に採用するのは「むしろこの自由を踏みにじれば国の平和や道徳心も必ず損なわれてしまう」という，それよりもはるかに強い主張である。綱紀粛正（「道徳心」の涵養）や治安維持（「国の平和」の維持）を名目にして自由を弾圧するなら，弾圧者が（どれだけ本気かはともかく，少なくとも名目上は）まさに守ろうとしているものこそが自由と諸共に台無しにされるという，当初の目論見とは真逆の結果が生じるという。そして『神学・政治論』本文は，まさにその理由を示す「さまざまな論考からできている」。このタイトルページだけ取り上げてみても，読み手に対するかなり親切な工夫が凝らしてあるのは明らかである。

ある著作を外から持ちかけられた仕事として翻訳するのではなく，翻訳するもしないも読み手の自主的な判断に委ねられている場合，読んでいるどの時点で翻訳したい／したくない気持ちが固まるかは，もちろん一口では言えないさまざまな条件に左右される。しかし，もし通読しなくても大意を確認できるような工夫がその著作に凝らされている場合，それは読み手に速やかな決断を促す決め手になるだろう。これも当然ながら想像の域を出ないが，シェリーは恐らく『神学・政治論』をそう先まで読み進めないうちに，既に翻訳を決意していたのではないだろうか。というのも，スピノザはタイトルページに限らず，ページをめくってからも，内容の速やかな理解を助けるためのさまざまな仕掛けを本文中に施しているからである。紙幅の都合上，ここではそのような仕掛けの具体例を，二つに絞って指摘しておく。

第一に指摘したいのは，この著作の序文が果たしている重要な役割である。いわゆる哲学書の序文には，本文を先に通読かつ熟読していないと内容がさっぱり理解できない，何のためにくっ

つけたのか分からないようなものも少なくないのだが，『神学・政治論』の序文は，そうしたものとは明らかに異なった性格を付与されている。結論を先取りしておくと，この序文は，恐らくかなり意図的に構成された『神学・政治論』のダイジェストなのである。

序文は内容的に前半と後半に分けられる。前半（1–7節）は『神学・政治論』全体の緩やかな導入部であり，序文の序文とでもいうべき箇所である。そこでは不安や恐怖からひとの心に迷信が生まれ，そうした迷信の移ろいやすさを補うために複雑怪奇な宗教儀礼が生まれ，そうした宗教を統治に利用する君主が現れ，さらにそうした統治に不都合な存在として，自由にものを考える人たちが迫害されるという，スピノザの問題意識の根幹部分が流れるように提示されていく。そして後半（8–16節）では，『神学・政治論』全20章の内容が，ほぼ章立ての順序通りで要約的に紹介されていく。共通の主題に費やされた一連の章が一まとめに紹介されることはあっても，紹介を省かれる章は一つもない。しかもこの部分は，その冒頭（8節）近くに既に取り上げたタイトルページとほぼ完全に重なる文章が置かれ，[45] その結び（16節末尾）となる文章も，（文頭の「わたしが以下に記すことは」が「わたしがこの論考の中で書いたことは」に変わることを除き）本文最終章の結びの文章（第20章18節末尾）と完全に一致する。[46] スピノザはこのように，序文そのものをかなり周到に，いわばミニチュア版『神学・政治論』に仕上げているのである。

第二に指摘しておきたいのは，全20章それぞれに，各章で取り上げられる主題を詳細に示した長めのサブタイトルが付けられていることである。こうした工夫自体は時代的にそう珍しいものではないが，これがあるとないとでは，特に内容確認を急いでいる場合の効率的理解に格段の違いが出てくる。これらのサブタイトルは，いわば手動で張られたリンクのようなものであり，読み手は序文で全体の流れを一度頭に入れておきさえすれば，その後は各章のサブタイトルを手がかりに，興味のある話題に一直線に「飛ぶ」ことが可能となるからである。さらにスピノザは，サブタイトルだけでは説明不足と思ったのか，少なからぬ章の冒頭近くでもその章で展開される内容の先取り的要約に努めているのだが，これについては割愛する。

5. おわりに——メアリー・シェリーの証言から

メアリー・ウルストンクラフト・シェリー（以下，パーシー・ビッシュと区別するためメアリーとする）の日誌には，シェリーが時に集中的に，時に何年ものブランクを挟みつつ，1817年10月から4年余りにわたって『神学・政治論』英訳に取り組んでいたことが記録されている。[47] 1820年3月には翻訳作業を進めつつ，『神学･政治論』と密接な影響関係にあるホッブズ『リヴァイアサン』を同時並行的に読み進めるという離れ業さえ見せている。[48]

1821年11月15日の記述「S［＝シェリーを指す。以下同じ］，エドワードと一緒にスピノザの翻訳を進める」を最後に，翻訳作業への言及は途絶える。日誌の編纂者は「この時翻訳作業が完結したcompleted」と断定し，この時からおよそ10ヶ月後（1822年9月29日）のメアリーの手紙にある記述「わたしはシェリーの完璧なスピノザ『神学・政治論』の翻訳Shelley's perfect translationを所持しています」を傍証として挙げているが，[49] この「完璧なperfect」は翻訳作業が「完了した」という意味にも，訳文の水準に「非の打ちどころがない」という意味にも解することができるので，シェリーの生前に全訳が完成していたかどうかは結局不透明なままである。

この最後の記述に顔を出しているエドワードとは，それから約8ヶ月後，嵐の海でシェリーと一緒に命を落とすエドワード・ウィリアムス（Edward Williams: 1793–1822）のことだが，そのウィリアムスの日誌（1821年11月11日）によると，シェリーは脱稿の暁には訳者として自らの名を公

にし，しかも翻訳にいわば箔をつけるため，スピノザの略伝を書き下ろして訳者序文がわりに巻頭に付すつもりでいたという。[50] どうやら単なる手慰みの翻訳ではなく，最初から出版する気だったらしい。

メアリーの日誌の記述だけを頼りに，彼女自身の翻訳作業への貢献度や貢献内容を正確に見積もることは，容易ではない。少なくとも，作業の初期段階で部分的に口述筆記を担当していたらしいのは，「Sの口述に基づいてスピノザの訳文を書き留める」という記述が残っていることから明らかと思われる。[51] さらに1820年代に入ってからは，「Sと一緒にスピノザを訳す」とか，シェリーへの言及なしに「スピノザを訳す」といった記述も見られるようになるため，[52] ここを素直に読む限り，メアリーが翻訳の進行過程で単なる筆記役以上の役割をこなすようになっていた可能性も否定しきれない。さらに仮定の積み上げになってしまうが，仮に訳稿がシェリーの難船死の時点で完成に達していなかったとすると，それを曲がりなりにも「完璧な翻訳」と言えるような状態までメアリーが補筆していたという推測も不可能ではないだろう。もちろん，彼女のラテン語力がどの程度のものだったのか知るすべが（少なくとも現時点での筆者には）ない以上，上述したことはみな，単なる可能性の指摘の域を出るものではない。

しかし，『神学・政治論』の翻訳作業そのものへの貢献度は容易に見積もりがたくても，内容の理解に関してはその限りではない。たとえそれに対する理解や共感の度合いが二人の間で完全には重なっていなかったとしても，18世紀末のドイツ語圏ではまだ公の言論空間で取り上げることさえ憚られていたこの著作の内容を，シェリーの翻訳作業に協力する過程で，メアリーもまた若い頭脳で柔軟に吸収していったのは間違いないと思われる。

周知のように，メアリーはシェリーの没後，きわめて積極的に彼の遺稿の整理・編纂・出版を試みている。[53] しかし『神学･政治論』訳稿については，前述の手紙の続きの部分にも「わたし［メアリー］に代わって，これ［訳稿］をどこかの書籍商に売りつけていただくことはできますでしょうか－たとえばロングマンとかそういうところに」とあるように，[54] 出版を持ちかけはしたようだがどうやら成功しなかったらしく，訳稿も発見されないまま今日に至っている。もし今もどこかに埋もれていて，ジョージ・エリオット訳『エチカ』のように，いつか発見されて日の目を見る時が来るなら，一研究者としてこれほど喜ばしいことはない。

＊本稿には，以下の競争的研究資金による研究成果が含まれる。
・日本学術振興会･科学研究費助成事業（科研費）基盤研究（C）「レリギオとレギオの狭間：セファラディーム・アシュケナジーム・ミズラヒーム」（課題番号：17K02033）

注

1）本稿は去る2020年12月5日，日本シェリー研究センター第29回大会（Zoomによる遠隔開催）シンポジウムで発表された同名の講演原稿に，加筆修正を施したものである．
2）以下のアブストラクトは，『日本シェリー研究センター年報』第29号（2021年7月）p. 3初出の英文要旨を，同会の了承のもとに再録したものである．この場を借りて感謝申し上げる．
3）スピノザ（畠中尚志訳）『神学・政治論』岩波文庫，1944年，全2巻.
4）スピノザ（吉田量彦訳）『神学・政治論』光文社古典新訳文庫，2014年，全2巻.
5）Feldman, Paula R. and Scott-Kilvert, Diana (ed.): *The Journals of Mary Shelley 1814-1844*. Oxford (Oxford University Press), 1987. Vol.1, p. 182.
6）Paulus, H.E.G. (Hrsg.): *Benedicti de Spinoza Opera quae supersunt omnia*. Iena, 1802–1803.
7）その後念のため，シェリーがスピノザ著作集を注文している書簡の原文を確認したところ，シェリーは

「スピノザは神学・政治論と遺稿集で，少なくとも現在のところは十分足りるでしょう（The Tractatus Theologico-Politicus & the Opera Posthuma of Spinoza will fully suffice, at least for the present.）」という書き方をしていた（Jones, Frederick L. (ed.): *The Letters of Percy Bysshe Shelley*. Oxford (Oxford University Press), 1964. Vol. 1, p. 347–348）．『神学・政治論』と『遺稿集』が入手できればもう「十分」で，これ以外のスピノザの著作（『デカルトの哲学原理』）は不要という意味だろう．ここを素直に読む限り，どうやらシェリーも注文を受けた書籍商もパウルス版の存在を知らなかったのか，あるいはパウルス版が（その可能性は低いと思うが）既に品切れになっていたのか，古い版の『神学・政治論』を求めたらしい．ただしこの後の展開を示す書簡が残っていないため，彼が最終的に入手できた版がどれであったかは結局不明である．

8）シェリーの時代から少し下った1850年代に，メアリー＝アン・エヴァンズ（Mary Ann Evans: 1819–1880）という英国人女性が『エチカ』の初の英訳を試みている．しかし1856年に完成をみたこの訳は，出版交渉を買って出た人物と出版社の意見が合わず，結局お蔵入りになってしまう．この英訳『エチカ』が遂に刊行され注目を集めたのは，完成から実に164年後の2020年年初のことである．ジョージ・エリオットGeorge Eliot名義で19世紀英文学史に輝く数々の小説を遺した彼女が亡くなって，既に140年が経過していた．このエヴァンズもしくはエリオット訳が「管見する限り，『エチカ』の初めての英訳」だという記述については，Carlisle, Clair (ed.): *Spinoza's Ethics. Translated by George Eliot*. Princeton (Princeton University Press), 2020. p. 1を参照．なお，奇しくもこれとほぼ同時に刊行されたフランス大学出版局版スピノザ著作集第4巻『エチカ』によると，現在判明している限りで最初の『エチカ』英訳が刊行されたのは1870年のことである（cf. *Spinoza Œuvres. Tome IV. Ethica/Éthique*. Paris (Presses Universitaires de France), 2020. p. 656）．

9）ヤコービ『スピノザの学説に関する書簡』は，田中光（1948–）による初の日本語訳が先年刊行された（知泉書館，2018年）．

10）正確には，いわばハブ空港的な役割の仲介者エリーゼ・ライマールス(Elise Reimarus: 1735–1805）を間に挟んだ間接的な文通だったのだが，話が面倒になるため省略する．

11）ヤコービ『スピノザの学説に関する書簡』邦訳p. 130–151（スピノザの学説の第一の叙述），p. 152–180（スピノザの学説の第二の叙述）．

12）同，p. 170.

13）cf. Beiser, Frederick C.: *The Fate of Reason*. Cambridge (Harvard University Press), 1987. p.47–48. バイザー（Frederick Beiser: 1949–）は以上3つの論点をそれぞれ1. 外殻outer shell，2. 内層inner layer，3. 隠された内なる核hidden inner coreと呼び，汎神論論争が当時引き起こした衝撃を理解するには（1および2に遮られて見えにくい）特に3の論点を念頭に置くことが欠かせないと指摘している．

14）ヤコービ『スピノザの学説に関する書簡』邦訳p. 181–207.

15）ともすれば忘れられがちな，ヤコービのこうした『エチカ』の賛嘆者・擁護者としての側面を強調した解釈としては，例えばSandkaulen, Birgit: Jacobis Spinoza und Antispinoza. In: dies.: *Jacobis Philosophie. Über den Widerspruch zwischen System und Freiheit*. Hamburg (Felix Meiner), 2019. S. 15–31. (u.a. S.19–26)を参照．この論文の元になった2012年11月4日の大阪大学での講演原稿は，ビルギット・ザントカウレン（下田和宣訳）「ヤコービのスピノザとアンチ・スピノザ」として『スピノザーナ』第13号（2012）p. 41–61に訳出されている．

16）例えばヘルダー『神――スピノザをめぐる対話』（初版1787，第2版1800）を参照（吉田達訳，法政大学出版会，2018）．ただしヘルダーはスピノザの神に「善意」を読み込むという明らかな誤読を犯しており，ヤコービが『スピノザ書簡』第2版以降に付した付録（第4および第5付録，邦訳p. 259–276）の中でも（やんわりと，ではあるが）容赦なく批判されている．

17）スピノザからゲーテが受けた思想的影響については，ゲーテ自身のテクストから確認できることを丹念に読み解いた平尾昌宏「ゲーテ・スピノザ・スピノザ主義――誰が『神即自然』を語ったのか」『モルフォロギア』第35号（2013年），p. 2–28を参照．詳細は別稿で論じたので割愛するが（吉田量彦「超越者のいない世界の倫理と倫理学」ゲーテ自然科学の集い2020年度総会（Zoomによる遠隔開催）シンポジウム原稿，2020年11月7日講演，『モルフォロギア』第43号（2021年）に加筆修正の上掲載予定），平尾の指摘によると，ゲーテが「神すなわち自然」を明確に語ったテクストは存在せず，スピノザから

直接受けた影響関係がテクストから確認できるのは，むしろ『エチカ』後半部で重要性を増す「直観知 scientia intuitiva」の思想であるという．

18）ヤコービがレッシングの発言として『スピノザ書簡』に記録した言葉（邦訳p. 81．ただし文脈に合うよう独自に訳出）．実態をどれだけ反映しているかはともかく，汎神論論争以前のスピノザの扱いを象徴的に表した有名な言い回しだが，正確な典拠を挙げずに引用されることが多いため，出典が『スピノザ書簡』の，しかもレッシングの発言の間接記録であることは，ドイツ語圏でも意外と知られていないようである．Vgl. Liessmann, Konrad Paul: Der tote Hund. In: Waibel, Violetta L. (Hrsg.): *Affektenlehre und amor Dei intellectualis. Die Rezeption Spinozas im Deutschen Idealismus, in der Frühromantik und in der Gegenwart*. Hamburg (Felix Meiner Verlag), 2012. S. 9–12.

19）書簡23（1665年3月，書簡番号はゲプハルト版スピノザ著作集（Gebhardt, Carl (Hrsg.): *Spinoza Opera*. Heidelberg (Carl Winter), 1924–1925）に準拠）にある「わたしのエチカ mea Ethica」という表現から，最終的な完成形態に至る10年前からスピノザ自身が「エチカ」という書名を決めていたことがうかがえる．

20）『スピノザの学説に関する書簡』邦訳p. 140–141.

21）『スピノザの学説に関する書簡』邦訳p. 184（強調は原文，［　］は吉田の補完，以下同様）．

22）『スピノザの学説に関する書簡』邦訳p. 61．煩瑣になるから本文では断らなかったが，これはハブ役のライマールスにあてた間接的な返信である．

23）同，p. 100.

24）以下のヘルダーにも見られるように，『神学・政治論』は同時代の党派的要請から生まれた「臨時の仕事」に過ぎず，『エチカ』とは思想的に連続していない，という理解（というか無理解）は20世紀に入っても無くならなかった．それを考え合わせると，ヤコービのこうしたスピノザ理解は時代を大きく先取りした卓見といえる．例えばカール・シュミット（Carl Schmitt: 1888–1985）のスピノザ解釈は，こうした無理解が最終的に一番非生産的な結果をもたらした典型例と思われるが，これについては吉田量彦「非政治的ロマン主義の源か，政治的決断主義の内なる敵か――戦間期カール・シュミットのスピノザ理解とその空白」（『モルフォロギア』第41号，2019年，p. 64–89）を参照．

25）『神』邦訳 p. 10.

26）『神』邦訳 p. 24.

27）書簡84（もとは『政治論』冒頭に収録）で執筆構想と，この時点（死の数ヶ月前と思われる）での進捗状況が報告されている．

28）Vgl. „Wichtig war die Suche.“ (Interview mit Martin Mulsow.) In: Salzwedel, Johannes (Hrsg.): *Die Aufklärung. Das Drama der Vernunft vom 18. Jahrhundert bis heute*. München (Deutsche Verlags-Anstalt), 2017. S.49-57. S.52. und Beiser, Frederick C.: *The Fate of Reason*. p.49–50.

29）吉田量彦「訳者解説」『神学・政治論』光文社文庫，2014，下巻p. 370–371を参照．

30）Vgl. „Wichtig war die Suche.“ S. 53–55. なお，ムルゾー（Martin Mulsow: 1959–）は投獄は「比較的稀になっていた」と述べているが，中には理神論Deismusの嫌疑で18世紀後半に12年間にわたり投獄された人物（Georg Schade: 1712–1795）などもいたことを付加している（S. 52–53）．この人物については Mulsow, Martin: Schade, Georg. In: *Neue Deutsche Biographie* 22 (2005), S. 494–495も参照．

31）たとえば*The Fate of Reason*でスピノザ主義および汎神論論争の詳細な紹介に努めたバイザーも，これに続く時代，いわばドイツ語圏における政治の季節を取り上げた続編的著作（Beiser, Frederick C.: *Enlightenment, Revolution, and Romanticism. The Genesis of Modern German Political Thought, 1790–1800*. Cambridge (Harvard University Press), 1992.（杉田孝夫訳『啓蒙と政治』法政大学出版局，2010））ではスピノザに一度も言及しない．

32）Vgl. Elias, Norbert: *Über den Prozess der Zivilisation. Soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen*. Erweiterte Ausgabe. Frankfurt am Main (Suhrkamp), 1997. Bd.1. S. 98–124.

33）*Ibid*. S.109.

34）*Ibid*. S.113.

35）*Ibid*. S. 111–112, S. 121–122.

36）*Ibid*. S. 100–103. ここに収められたフリードリヒ2世自身の文章（ちなみに，とても読みやすい稚拙なフ

ランス語で書かれている）を読むと，例えば18世紀後半のドイツ語圏で開花を見たさまざまな文学運動に対し，この王がいかに無知・無関心・無理解であったか分かる．こうしたフランス語・フランス宮廷文化崇拝およびドイツ語・ドイツ民衆文化蔑視がフリードリヒに限らず，ドイツ語圏の支配階層全般に幅広く共有されていたことについては，ベーン『ドイツ18世紀の文化と社会』三修社，1984（原著1922），第1章（p. 1–81）を参照.

37）誰かがシェリーに『神学・政治論』を読むよう勧めた可能性は決して低くないが，少なくとも彼の書簡からその誰かを探し出すことは困難であった.

38）以下の原文は，あえて，18歳の吉田が初めて読んだ新井明『英詩鑑賞入門』研究者出版，1986，p. 53–58のテクストに準拠する.

39）新井上掲書でも，アルヴィ宮本なほ子（編）『対訳　シェリー詩集』岩波文庫, 2013, p. 134でもこうなっているが，オックスフォード版シェリー選集（Leader, Zachary and O'Neill, Michael (ed.): *Percy Bysshe Shelley*. *The Major Works*. Oxford (Oxford University Press), 2003. p. 446）に収録されたヴァージョンでは“An army *whom* liberticide and prey/Makes as…”である（強調 吉田）．これだと副文内はliberticide and preyを（まとめて三人称単数扱いで）主語にせざるをえないので，訳文は「自由殺しと略奪が，それを振り回す誰にとっても両刃の剣となって，その軍隊を作り上げている」となる．厳密にはどちらの読みを優先するべきなのか判断に困るが，どちらを選んでも本稿の主旨に大きな影響は出ないと思われるため，ここでは訳文の作りやすさを考えてwhichを採用しておく．なお，新井はテクストとしてはwhichを採用しつつ，別稿のwhomに配慮して，このwhichを目的格として解釈している（上掲書p. 55）.

40）例えば上述のオックスフォード版シェリー選集の該当箇所の訳注には，はっきりと「シェリーの造語coinage」とある（p. 774）．ただしこれ以上の説明はない.

41）Oxford English Dictionary（https://www.oed.com/）2020年11月21日参照．ちなみにオンライン版で自動表示される用例に偶然出てきたのだが，シェリーは2年後の長詩「アドネイアスAdonais」（1821）でもこの言葉を一度使っている（第4連）.

42）レオ・シュトラウス（Leo Strauss: 1899–1973）が有名にした，スピノザは迫害を逃れるために本心を巧みに行間に隠しているというテーゼ（cf. Strauss, Leo: *Persecution and the Art of Writing*. Chicago (Chicago University Press), 1952）は，書き方の工夫に関する個別的な指摘としてはともかく，解釈の大枠に関する指摘としては的を外している．スピノザはむしろ，本心を隠そうとしても隠し切れないからこそ『神学・政治論』を匿名で刊行したし，本心が好意的な読み手だけでなく悪意ある読み手にも容易に届いてしまうからこそ，この著作がオランダ語に訳され，潜在的な迫害者に一層届きやすくなることを警戒したのである（書簡44）.

43）『神学・政治論』邦訳（以下光文社版を用いる）上巻p. 25参照．原文はこうなっている（改行箇所の表記は省略）．“TRACTATUS THEOLOGICO POLITICUS Continens Dissertationes aliquot, quibus ostenditur libertatem philosophandi non tantum salva pietate et reipublicae pace posse concedi, sed eandem nisi cum pace reipublicae ipsaque pietate tolli non posse.”

44）『神学・政治論』「訳者まえがき」上巻p. 21–24参照.

45）「実はこの自由というものは，それを認めても道徳心や国の平和は損なわれない，というだけではない．むしろそれどころか，もしも自由が踏みにじられたら，国の平和も道徳心も必ず損なわれてしまうのである．わたしがこの論考の中で証明したかったのは，何よりもまずこのことなのだ」

46）「わたしが以下に記すことは，ひとつ残らず，わが祖国の至高の権力の持ち主たちの検証と判断に喜んで委ねたい．つまり，もしわたしが言うことの何かが祖国の法律に反しているか，またはみんなの安全の妨げになると判断された場合，それは言わなかったこととしていただきたい．わたしも人間だから，誤ることもあると自覚している．ただそう簡単に誤らないための細心の配慮は重ねてきたし，また特に，何を書くのであれ，祖国の法律や道徳心やよき習わしと完全に対応するよう配慮してきたつもりである」

47）*The Journals of Mary Shelley*. Vol.1. p. 182–383.

48）*Ibid*. p. 312–313.

49）*Ibid*. p. 383.

50）*Ibid*.
51）*Ibid*. p. 182.
52）*Ibid*. p. 306.
53）シェリー没後の遺稿の扱いに関する要約的記述としては，例えば上掲『対訳　シェリー詩集』p. 347–355を参照.
54）*The Journals of Mary Shelley*. Vol. 1. p. 383.

「天下篇」荘子に後接する郭象「荘子序」

水　野　厚　志

Guo Xiang's Introduction of Zhuangzi Coming After "Tianxia"

MIZUNO, Atsushi

Abstract

At the stage before original *Zhuangzi* had edited to present one, there were various schools of *Zhuangzi* and each had annotations written around Xijin Dynasty. It is thought that later "Huishi" was inserted before the paragraph that was supposed to be the ending for "Chapter Tianxia" and was arranged. This is because there is no any comment on Taoism and Alchemy although in other parts of Chapter Tianxia writers used the method of criticism by dividing the two. Also the reason for comparing the analysis of "Wu" (object) and Zhuangzi's "Tao" is that there are some incongruity and instability when thinking from the Tao of Saint and Emperor emphasized in "Chapter Tianxia", so it is thought that during the time between Tang Dynasty and Song Dynasty someone had removed sentences after "Wei Zhi Jin Zhe" and put them at the front as Guo Xiang's *Introduction*. Later as Song Dynasty's *Zhuangzi* has widely spread, GuoXiang's *Introduction* with strong meaning in the history of thoughts was broadly recognized, and thus original Guo Xiang's *Introduction*, which main content was about text edition, was recognized as unnecessary and had been deleted since the whole "Chapter Tianxia" had the character as postscript as well. As a result, it had disappeared from any versions of texts after Song. The fact that after the fuss of Guo Xiang's "Introduction of *Zhuangzi*"'s artificial work at *Song*'s Zhenzong time, Wang Wu had already separated "Saint and Emperor" in the introduction and "Chapter Tianxia" in *Nanhuazhenjingxinzhuan* have already provided the clue.

Keywords: 荘子（Zhuangzi），天下篇，荘子序，內聖外王

目　次

はじめに
一.「天下篇」と「莊子序」における問題點
(1)「天下篇」における問題點
(2)「莊子序」における問題點
二.「內聖外王」における諸學派と莊子
三.「天下篇」莊子に後接する郭象「莊子序」
まとめ

は じ め に

『莊子』「天下篇」は，郭象が編纂した現行本三十三篇の最後の篇に當たり，後序的役割を擔っている。また，宋代の林希逸『莊子鬳齋口義』・褚伯秀『南華眞經義海纂微』，明末の王夫之『莊子解』より今日に至るまで，歷代の注釋者によって，先秦諸子百家に對する最初の思想史概說として非常に高く評價されてきた[1)]。

そして，諸學派の思想について，論述の中心を爲しているのは古の道術―內聖外王の道―の傳統と繼承についてであり，後述するように，論理學的な側面も含めて，莊子に向けて深化・向上している。ところが，肝心の莊周については「まだ充分に道を極め盡くしていない者（未之盡者）」と評價され，莊周の哲學を古の道術の最も正統的な繼承者・根源的本質的な把握者として，最高の位置づけを行おうとするところまでには至っていない。後序的役割を擔うべき『莊子』「天下篇」はその役割を果たさないまま文章を終えているのである[2)]。

一方，郭象「莊子序」の眞僞を巡る議論は，古くは北宋の時代からあり，眞宗の判斷によって一端はその議論に終止符が打たれたものの，近年再び俎上に載せられ，王利器，餘敦康らを始めとして，今日に至るまでその眞僞問題は陸續している[3)]。

かつて武內義雄は，日本の高山寺所藏舊鈔卷子本『莊子』の跋尾の文と共通する部分が陸德明（五五〇－六三〇）の『經典釋文』序錄中に見られ，郭子玄（郭象の字）の語としているところから，高山寺所藏舊鈔卷子本末の跋尾全體が郭象の跋文であるとした。この說は今日に至るまで廣く支持されているが，現行本『莊子』の序文である郭象「莊子序」と，もう一つの郭象の跋文としての「莊子序」との關係もはっきりしないまま今日に至っている[4)]。

作者・體裁等多くの疑問を孕んでいる郭象「莊子序」と『莊子』「天下篇」の兩者ではあるが，「天下篇」の中心を成している「內聖外王」の四字句が現れているのは，『莊子』の中でも「天下篇」の一箇所だけであり，郭象注まで廣げてみても他には全く見られない。本文以外で唯一用いられているのは郭象「莊子序」中の一箇所だけなので，兩者には，特別な關係があると考えるべきである[5)]。

郭象自身の著作かどうかといった郭象「莊子序」の眞僞問題を含め，問題點の多い兩者ではあるが，內容上，共通する項目も見られる。當論考ではその問題點と共通項を分析することによって，長年「天下篇」と「莊子序」の兩者につきまとってきた疑問を解決しようとするものである。

一.「天下篇」と「莊子序」における問題點

(1)「天下篇」における問題點

「天下篇」の篇首では當代の思想について俯瞰し，その後で諸學派の思想について毀譽褒貶をそれぞれ加え，概括している。また，篇末に於いて，惠施の代表的な論證命題「歴物十事」と，惠施・桓團・公孫龍を中心とする當時の詭辯的な論理學の論證命題「辯者二十一事」を莊周の道の哲學との關連において批判し論述している。しかし「天下篇」の結論になっていないばかりか，莊子書中において散々批判を加えてきた論說的な論理學の論證命題で締めくくられているのは，違和感を感じる。それは，もともと「惠施」は郭象の三十三篇本成立前の五十二篇本においては，一つの獨立した篇であったが，「天下篇」の末尾に加えたことによって弊害を生じているからである。

譚戒甫は「現存莊子天下篇的研究」の中で，王夫子の『莊子解』を引用し，「天下篇」に頭となる總論があるのに尾となる結論がないことに奇怪さを覺える。結論を埋めるために長文ではない「惠施」を持ってきたものの，いびつさは免れない。私は更にこの第七章（「惠施」）は，原文が或いはそれほど長くなく，（「天下篇」の頭となる總論に當たる）第一章に比べてどうしても見劣りがするように思われる。或いは後世の注釋者がもともと存在した第七章の文に不滿を持っていたので，單行の「惠施」と取り替えてしまったのかもしれない。元の第七章と，「惠施篇」との間に似ている點が有ったので，敢えて第七章と「惠施篇」とを入れ替えたのかも知れない，と述べている。現行「天下篇」の「惠施」は，譚戒甫の推測するように取り替えられたか，或いは穿った見方をすれば，第七章に當たる「惠施」の項目は本來無かったのではないかと思われる。「惠施」で「天下篇」を締めくくってしまうと，頭となる總論があるのに尾となる結論がなく，莊子自身の結論も宙に浮いたままになってしまうからである[6)]。

また，「天下篇」の篇首では，古の道術としての內聖外王の道を提示し，その後でそれぞれ師承關係にある五グループについて，①墨翟・禽滑釐・墨子後學，②宋鈃・尹文，③彭蒙・田駢・愼到，④關尹・老聃（老子）⑤莊周（莊子）の順に分析し，莊子に至るまでの道を內に抱く聖人・それを外に用いて萬物を化育する帝王の道である內聖外王の深化の過程を描いている。そして，莊子を古の道術の最も正統的な繼承者と捉えた上で，最高の位置付けを行おうとする所に「天下篇」の作者の意圖が見られる[7)]。

一方，莊子の評價は，「道の本源は廣大であって尙且つ末端まで屆き，安らかな調和に滿たされて高い境地へと上っていくものということができる（其於本也，弘大而辟，深閎而肆，其於宗也，可謂稠適而上遂矣）」とあり，上文に照らせば「天人」ということになり，名實ともに眞の內聖外王の體現者ということになる。

それに對して，其の風（「萬物の根源である道を精微なものとし，恬淡無欲で神明の本性といっしょになろうとする」古の道術）を聞いて悅び，濡弱謙下を體現しているとして評價されている關尹・老聃は，自ずとその評價は「莊子」より下であるはずである。しかし實際は，關尹・老聃の節末の評價では，「至極と謂うことができる。關尹 老聃は，古の博大眞人であるかな（可謂至極。關尹老聃乎，古之博大眞人哉）」というように，最高の贊辭を送られているのに對し，莊子の節末の評價は，「まだ充分に道を極め盡くしていない者（未之盡者）」というように極めて中途半端な締めくくり方をされている。

(2)「莊子序」における問題點

郭象注のテクニカルタームの用いられ方を見ていくと，郭象獨自の思想と關わる語句―例えば「獨化」・「自得」・「所以迹」―であれば，その世界を限りなく廣げていくが，反對に不可知なものや關心のないものには注記されていない[8)]。短い序文の中に現れた「內聖外王」という語句が，三十三篇中の郭象注全てを繙いても探し出せないのは，極めて異例である。

古勝隆一は，序文は「自著に對する序」―いわゆる「自序」と「他人の記した書物や文章群を整理した際に加えた序」の二者に大別することが出來，前者のいわゆる「自序」が本文の一部となって書中の一篇をなすのに對し，注釋家が書いた序は序自體が一篇をなすわけでなく，本文に對して附錄的に加えられている點で大きな違いがあると述べている。よって「天下篇」は，『史記』の「太史公自序」，『漢書』の「班固序傳」，『論衡』の「自紀篇」等々と同じく，前者の「自序」に分類されるべきである。また，古勝隆一は後者の中でも注釋家の序文は，古注として知られる古典注釋であり，後漢以來蓄積され東晉時代にはぼ出揃った序文である。序文とは，書物の價値と內容を部外者に向けて傳達するための手段であり，注釋書に限っていえば，序文の執筆とは古典を社會に向けて發信する行爲に他ならない。劉向の「敍錄」と後の後漢から東晉に至る間の注釋家の序文は內容的に近く，學術史に於いて似たように機能している，と主張しているのを參照すれば，郭象「莊子序」は書物の價値を部外者に向けて傳達し發信するという意圖によって書かれておらず，「天下篇」同樣，『莊子』のための「自序」としての性格が極めて濃厚である。

また，馮友蘭は郭象「莊子序」について，「莊子序」の「內聖外王」の王が强調されているのは，「莊子注」にはそぐわない。萬物の性分を强調するのが「莊子注」だとし，「莊子注」の序文ではなく，『莊子』に對する序文であるとしている。郭象「莊子序」について，古勝とはアプローチの仕方は異なるが，注釋家の序文としての體を爲していない旨，主張している點は共通している[9)]。

二.「內聖外王」における諸學派と莊子

諸學派に於ける「內聖外王」の深化・向上は，例えば，「物に對する追求」といった論理學的な側面では，ただ辯別に心を寄せるだけの「後世之墨者」として扱われていた「堅白異同之辯」から，宋鈃・尹文の「別宥」，彭蒙・田駢・愼到の「萬物を齊しくみることを道の基本と爲した（齊萬物以爲首）」，さらには莊周の「是非の區別を無理にしない（不譴是非）」へと移っている。そして，「天下篇」冒頭の總論の中には，「天地の美を判ち，萬物の理を析つ（判天地之美，析萬物之理）」とあり，天地の美・萬物の理を辯別することによって內聖外王が蔽われ明らかにされないのだと說き，各思想家が詭辯による物の辯別を弄すことによって道術が分裂してしまった旨，說明している。

そして，各思想家は思辯によって物を辯別することを放棄し，萬物齊同へと深化していき，萬物齊同の理想型へと近づくにつれて，「內聖外王」についてもよりいっそう完成されていく。その推移については次の通りである。

冒頭の墨翟・禽滑釐では，內聖の面は非樂・節用・薄葬が，外王の面は氾愛（博愛）・非攻が擧げられているが，何れも全て行き過ぎているということで，酷評されている。それが，次の思想家グループ宋鈃・尹文になると內聖の面は「人間の欲は少ないことを內面の主張とする（以情欲寡淺爲內）」及び「心を淸らかにする（白心）」が，外王の面は「他國への攻擊を禁じ武器を持たないことを外面の主張とする（以禁攻寢兵爲外）」が擧げられ，穩やかな批判に落ち着いている。また，彭蒙･田駢･愼到では，內聖の面は「愼到は知惠を棄て己を去る（愼到棄知去己）」，及び「萬

物を比較し差別しない齊同の思想を得た（得不敎焉）」があり，同様に穏やかな批判に落ち着いている[10]。そして關尹・老聃では內聖の面は「自分を空しくし虛靜の境地にいて萬物を傷つけないことを內面の實とする（以空虛不毀萬物爲實）」が，外王の面は「柔らかく弱々しくへりくだることを外面的な態度とする（以濡弱謙下爲表）」が擧げられ，「上古の博く大きい德を持つ眞人であることよ（古の博大眞人なる哉）」と評價されていて貶辭は全く見られない[11]。

續いて莊周であるが，結語に於いて「まだ充分に道を極め盡くしていない者（未之盡者）」と評價され，不完全なままで終わってしまっている。莊子の項目は，文字數で言うと二百二十八文字しか費やしていないのに對し，冒頭の墨翟・禽滑釐では，倍以上の五百四十三文字の表記である[12]。『莊子』の後序としての性格を考えれば，バランスの惡さがみられ，構成上の問題があるようである。この後に莊子を評價する締めくくりの文章が入っていたと考えるべきではないだろうか。

三.「天下篇」莊子に後接する郭象「莊子序」

始めに，對象となる文を併記した方が分かり易いため，煩を厭わず「天下篇篇首の後半部分」，「天下篇」莊子の後半部分，郭象「莊子序」の三者を竝べ，それぞれに譯を付けることによって，その關係を見ていくことにする[13]。

「天下篇」篇首の後半部分

天下大亂，賢聖不明，道德不一。天下多得一察焉以自好。譬如耳目鼻口，皆有所明，不能相通。猶百家衆技也。皆有所長，時有所用。雖然，A不該不徧，一曲之士也。判天地之美，析萬物之理，察古人之全，寡能備於天地之美，稱神明之容。B是故內聖外王之道，闇而不明，鬱而不發。天下之人，各爲其所欲焉以自爲方。C悲夫，百家往而不反，必不合矣。後世之學者，不幸不見天地之純，古人之大體。道術將爲天下裂。

「天下篇」莊子の後半部分

…①獨與天地精神往來而不敖倪於萬物，不譴是非，以與世俗處。其書雖瑰瑋而連犿無傷也。其辭雖參差而諔詭可觀。彼其充實不可以已，②上與造物者遊，而下與外死生無終始者爲友。③其於本也，弘大而辟，深閎而肆，其於宗也，可謂稠適而上遂矣。雖然，④其應於化而解於物也，其理不竭，其來不蛻。⑤芒乎昧乎，未之盡者。

「莊子序」河南郭象子玄撰

a夫莊子者，可謂知本矣，故未始藏其狂言，言雖無會而獨應者也。夫應而非會，則雖當無用。言非物事，則雖高不行。b與夫寂然不動，不得已而後起者，固有閒矣，斯可謂知無心者也。夫心無爲，則隨感而應，應隨其時，言唯謹爾。故與化爲體，流萬代而冥物，豈曾設對獨遘而游談乎方外哉。c此其所以不經而爲百家之冠也。d然莊生雖未體之，言則至矣。e通天地之統，序萬物之性，達死生之變，而明內聖外王之道。f上知造物無物，下知有物之自造也。其言宏綽，其旨玄妙。至至之道，融微旨雅。g泰然遣放，放而不敖。

故曰不知義之所適，猖狂妄行而蹈其大方。含哺而熙乎澹泊，鼓腹而游乎混芒。至極乎無親，孝慈終於兼忘，禮樂復乎已能，忠信發乎天光。h用其光則其朴自成，是以神器獨化於玄冥之境而源流深長也。故其長波之所蕩，高風之所扇，暢乎物宜，適乎民願。弘其鄙，解其懸，灑落之功未

加，而矜夸所以散。

故觀其書，超然自以爲已當，經崑崙，涉太虛，而游惚怳之庭矣。ⅰ雖復貪婪之人，進躁之士，暫而攬其餘芳，味其溢流，彷彿其音影，猶足曠然有忘形自得之懷，況探其遠情而玩永年者乎。遂綿邈清遐，去離塵埃而返冥極者也。

譯文

「天下篇」篇首の後半部分

世の中が大混亂に陥ると聖人賢人は姿を隱し，道術も分かれてしまった。世の中の人々の多くは一面だけを捉えて自己滿足している。譬えば耳目鼻口（のそれぞれ）が何かをはっきりと捉えても，その機能を互いに統合できないようなものである。またそれは，諸子百家の多くの方術のようなものである。皆それぞれ長所があり，時には役に立つ。しかしながら，Ａ全體に遍く通じることの出來ない一方向に限られた能力を持つ者である。天地の美德を分斷し，萬物を貫く理法を分析し，古人の把握した完全な統一有る道を分裂させるばかりで，天地の美德をそのまま身に着け，靈妙な道とその明覺な働き方に一體化していけるものは少ない。Ｂこうしたわけで，道を內に抱く聖人・それを外に用いて萬物を化育する帝王の道は闇くおおわれて世に明らかにならず，ふさがって開かない。世の中の人々はそれぞれめいめいがしたいことをして自分で方術とみなしている。Ｃ悲しいではないか。諸子百家の學派は我が道を進むだけで反省もせず，これでは一致點は見出し得ない。後世の學者は不幸にして世の中の混じり氣のなさや上古の人々の道の大きな働きを目にすることはできない。道術はいまにも世の中の人々によってバラバラにされようとしている。

「天下篇」莊子の後半部分

…①（莊子は）ただ自分だけが天地自然の靈妙な働きとともに往來しながら，萬物の上に立っておごり高ぶるような事は無い。また是非の區別を嚴しく追及したりすることも無く，世俗の中に身を置いている。莊子の著書は珍しくて變わっているが，コロコロと移り變わって（事物を）傷つけることはない。莊子の言葉は珍しくて不揃いではあるが，奇拔で（素晴らしく）じっくりと味わうべきである。莊子は興に乘ると止まらなくなってしまい，②上は造物者と遊び，下は死生先後を忘れた者を友とする。③道の本源は廣大であって尙且つ末端まで屆き，安らかな調和に滿たされて高い境地へと上っていくものということができる。しかしながら，④時々刻々と變化する萬物に對應して，事物の性質を分析しようとするならば，その性質は把え盡くせず，引き起こされる事態も解きほぐせない。⑤莊子の道は芒々として捉えどころがなく，まだ充分に道を極め盡くしていない者である。

「莊子序」河南郭象子玄撰

ａ莊子は物の本質を知っている者と言うべきだ。だからこれまで狂言を藏（おさ）めたことはない。莊子の言葉は，（萬物と言葉の概念とが）符合していないが，ただ莊子だけが道に應じているのである。道に應じていても（萬物と言葉の概念とが）符合していなければ，當たっていても（爲政者には）用いられない。言葉は萬物と言葉の概念とが一致しなければ崇高であっても行われない。ｂ靜かにひっそりとして動かず，後に必要に迫られて立つ（內聖と外王）者と間には初めからへだてがある。莊子は作爲することなく動くことを知る者と言うべきである。心が無作爲であれば，

物に感じて自然と應じるのである。感應してその時に隨うのであり，ただ（自分自身を）愼むべきことをいう。そこで，あらゆる變化と一體になり，萬代に亘って萬物と冥合していたのであるが，どうして相對的な差異を設けて道に出會い，方外に談遊できたのか。ｃこれは荘子が常法によらなくても諸子百家に冠たる所以である。ｄ荘子は（まだ萬物と言葉の概念とが一致できないでいる點では）完全には道を體しきれてはいないが，その言葉は至極である。ｅ荘子の言葉は天地を統べる物に通じ，萬物のもって生まれた性質を序べ，死生の變化に通曉し，內聖外王の道を明らかにした。ｆ上は造物者（である道）は物ではない存在であることを知り，下は物が（それぞれ）自生自化することを知っている。荘子の言葉は廣々として勢いがあり，その內容は奥深くて微妙で捉え難い。最高の境地に到達した道は，微細に亘り內容は氣品に滿ちている。ｇ落ち着き拂っていて態度は變わらず，放たれ（天性の自己を解放し）ても傲り高ぶることはない。

だから，荘子は「正義に適うことを意識せず，心の欲するところに從って束縛されず，でたらめを行っても常道を踏み外すことはなく，（古代社會の理想通りに）口に哺を含んで靜かに清らかに樂しみ，腹をたたいて混沌の中に遊ぶ。最高の仁とは親しむことのない所に極まり，（年長者への）孝行と（後輩への）慈愛は自他共に忘れた所に完成し，禮樂はその（人の持つ）能力にたち返ることである。眞心を盡くし，僞りのない行いは（その人の持つ）自然の輝きから發せられる」といっている。ｈその輝きを用いるならば，その（人の本來持っている）素朴な性質は自然と釀成されるのである。こうしたわけで（天下を營爲できる無形無方の）神の器は（人閒の力の及ばないものであるが），ただ（深遠幽寂な）道の世界でのみ生成變化し，その根元は奥深く遠いのである。そこで，途切れることのない波によって搖り動かされ，强靱な風に扇がれることによって，事物の性質や道理，規律に通達し，民意をくみ，質樸さを廣め，非常に苦しい狀態から解放される。感情の赴くまま歡樂を縱にするような仕事は無くなり，自分の能力をひけらかす者もいなくなるのである。

よって荘子を讀めば超然としてすでに崑崙を經り，太虛に涉り、惚怳の庭に游び，心身ともに自由自在な境地に達することができると考えるのである。ｉいったい物欲にまみれた人であったり，出世欲に驅られた役人であっても，暫く荘子の殘香を嗅ぎとり，溢れ出す思いを味わい，（作中に描かれている）音と形をぼんやりと思い描けば，豁然として自分の身體が自然と得られていることすら忘れてしまうような感慨に達することができる。ましてや荘子の遙かなる思いに心を寄せ，永遠の生命を重視する者ならば尙更である。かくして荘子とは俗世から遠く離れ，俗塵と袂を分かち，本性に備わった分限に從って物と一體になる者なのである。

「天下篇」篇首の後半部分には，內聖外王（道術）に反する「一曲之士」について，Ａ「全體に遍く通じることの出來ない一方向に限られた能力を持つ者である。天地の美德を分斷し，萬物を貫く理法を分析し，古人の把握した完全な統一有る道を分裂させるばかりで，天地の美德をそのまま身に着け，靈妙な道とその明覺な働き方に一體化していけるものは少ない（不該不徧，一曲之士也。判天地之美，析萬物之理，察古人之全，寡能備於天地之美，稱神明之容）」とある。

遍く道に通じるものは道術であるが，一方向に限られた能力を持ち，天地の美德を分斷し，萬物を貫く理法を分析する者は，完全な統一有る道を分裂させる方術の士にすぎない。そして，その批判は天下篇全體の「內聖外王」の主要なテーマでもあり，墨子の堅白異同から，荘子の萬物齊同の完成に至るまでの一貫した考え方でもある。

また，問題の荘子評を下している⑤「荘子の道は芒々として捉えどころがなく，まだ充分に道

を極め盡くしていない者である（芒乎昧乎，未之盡者）」の前には，④「時々刻々と變化する萬物に對應して，事物の性質を分析しようとするならば，その性質は把え盡くせず，引き起こされる事態も解きほぐせない（其應於化而解於物也，其理不竭，其來不蛻）」とある。うがった見方をしなければ，莊子が「まだ充分に道を極め盡くしていない者」であるその一番の要因は，時々刻々と變化する萬物に對應して，事物の性質を分析しようとしたところにあると考えるべきである。

しかし，莊子の「天地の美德を分斷し，萬物を貫く理法を分析する」度合いは他の「一曲之士」に當たる諸子百家と決して同列に論じている譯ではない。「天下篇」莊子の後半部分に①「ただ自分だけが天地自然の靈妙な働きとともに往來しながら，萬物の上に立っておごり高ぶるような事は無い。また是非の區別を嚴しく追及したりすることも無く，世俗の中に身を置いている（獨與天地精神往來而不敖倪於萬物，不譴是非，以與世俗處）」とあるように，天地萬物の理法を分析しない莊子の立場を評價しているからである。從ってここでは，萬物齊同の立場から是非の區別・天地萬物の理法に對する分析を放棄したはずの莊子が，道を言葉で說明しようとすることに對する限界を述べているのであり，物の分析そのものの否定こそが「天下篇」のテーマなのである。

次に，「莊子序」にはｇ「落ち着き拂っていて態度は變わらず，放たれ〔天性の自己を解放し〕ても傲り高ぶることはない（泰然遣放，放而不敖）」とあり，やはり①の「ただ自分だけが天地自然の靈妙な働きとともに往來しながら，萬物の上に立っておごり高ぶるような事は無い（獨與天地精神往來，而不敖倪於萬物）」の文と類似した指摘となっている。なお，文中の「不敖」は，郭象注の中での用例はないにもかかわらず，「天下篇」と郭象「莊子序」の兩者の中でのみ用いられていることから，兩者の關係の深さを表していると考えられる。

また，「天下篇」篇首の後半部分のＣには「悲しいではないか。諸子百家の學派は我が道を進むだけで反省もせず，これでは一致點は見出し得ない（悲夫，百家往而不反，必不合矣）」とあるにも係わらず，「天下篇」莊子の後半部分の③には「道の本源は廣大であって尙且つ末端まで屆き，安らかな調和に滿たされて高い境地へと上っていくものということができる（其於本也，弘大而辟，深閎而肆，其於宗也，可謂稠適而上遂矣）」とあって，「莊子序」にａ「莊子は物の本質を知っている者と言うべきだ（夫莊子者，可謂知本矣）」と莊子のみが評價されていることと文意が繫がる。「一曲之士」へと墮してしまった諸子ではあるが，莊子に至って再び「道術之士」へと昇華しているのである。

「莊子序」のｂには，「靜かにひっそりとして動かず，後に必要に迫られて立つ〔內聖と外王〕者との間には初めからへだてがある。莊子は作爲することなく動くことを知る者と言うべきである。心が無作爲であれば，物に感じて自然と應じるのである。感應してその時に隨うのであり，ただ〔自分自身を〕愼むべきことをいう。そこで，あらゆる變化と一體になり，萬代に亘って萬物と冥合していたのであるが，どうして相對的な差異を設けて道に出會い，方外に談遊できたのか（與夫寂然不動，不得已而後起者，固有間矣，斯可謂知無心者也。夫心無爲，則隨感而應，應隨其時，言唯謹爾。故與化爲體，流萬代而冥物，豈曾設對獨遘而游談乎方外哉）」とあるが，「靜かにひっそりとして動かない者と，後に必要に迫られて立つ者（寂然不動，不得已而後起者）」は，「內聖外王」―道術を體得した莊子―を表現している。それだからこそ，直後にｃ「これは莊子が常法によらなくても諸子百家に冠たる所以である（此其所以不經而爲百家之冠也）」とあるのであり，古の道術の最も正統的な繼承者・根源的本質的な把握者として描かれている。

また，批判されている「一曲之士」と相對する「全體に遍く通じ，多方向に廣がる能力を持ち，天地の美德を分斷せず，萬物を貫く理法を分析することなく，古人の把握した完全な統一有る道を分裂させず，天地の美德をそのまま身に着け，靈妙な道とその明覺な働き方に一體化していけ

るもの」は，e「荘子の言葉は天地を統べる物に通じ，萬物のもって生まれた性質を序べ，死生の變化に通曉し，內聖外王の道を明らかにした（通天地之統，序萬物之性，達死生之變，而明內聖外王之道）」とある「內聖外王」に則った荘子の在り方そのものである。

そこで改めて「天下篇」荘子の末尾の④「時々刻々と變化する萬物に對應したり，事物の性質を分析したりしようとするならば，その性質は把え盡くせず，引き起こされる事態も解きほぐせない。荘子の道は芒々として捉えどころがなく，まだ充分に道を極め盡くしていない者である（其應於化而解於物也，其理不竭，其來不蛻。芒乎昧乎，未之盡者）」とある結語の「未之盡者」であるが，「荘子序」dに「荘子は〔まだ萬物と言葉の概念とが一致できないでいる點では〕完全には道を體得しきれてはいないが，その言葉は至極である（然莊生雖未體之，言則至矣）」とあるのは，唐初の道士で『荘子集釋』の疏に相當する注を付している成玄英（六〇八－六六九）によって「荘子の書について言うと，上品で奥ゆかしく，ぼんやりとしてはっきりせず，耳目〔といった感覺器官〕では言い盡くせない。もしも言語現象によって求めようとするならば，其の趣を窮めることは出來ないのである（言莊子之書，窈窕深遠，芒昧恍忽，視聽無辯。若以言象徵求，未窮其趣也）」と記されているのと同樣，言語現象では捉えきれない道を表現しようとするところに荘子の限界があることを述べている。そして直前の④「其應於化而解於物也，其理不竭，其來不蛻」は，成玄英の解釋によって讀み直せば，「時々刻々と變化する萬物に對應したり，事物の性質を分析したりしようとするならば，その性質は把え盡くせず，引き起こされる事態も解きほぐせない」というマイナスイメージの譯文から「千變萬化する世界に對應して，森羅萬象の在り方を解說するとき，說明する眞理は耳目〔といった感覺器官〕では言い盡くせないほどの深さをもち，〔もしも言語現象によって求めようとするならば，〕其の趣を窮めることは出來ないのである」といったプラスイメージの譯文に轉換される。そして，その文意は，「荘子の言葉は天地を統べる物に通じ，萬物の性質を序べ，死生の變化に通曉し，內聖外王の道を明らかにした（通天地之統，序萬物之性，達死生之變，而明內聖外王之道）」とあるのと同樣，荘子は內聖外王之道を體現した唯一の存在であることを表している。

また，「未之盡者」は，「天下篇」篇首の文の後半の文によって解釋を補うと，「しかし，荘子は變化する萬物に對應したり，事物の性質を分析した點では，事物の性質を把え盡くしていないのだが，それでいて荘子は餘計な天地の美を分斷し，萬物の理を分析するといったことはせず，道を分裂させることなく，天地の美德をそのまま身に着け，靈妙な道とその明覺な働きに一體化しているので至極の存在である」という肯定的な意味を持っていたことが明らかとなる。「未之盡者」で終わってしまっていた荘子の「天下篇」は「荘子序」が加わることによって完成されるのである。つまり，「天下篇」Bに「こうしたわけで，道を內に抱く聖人・それを外に用いて萬物を化育する帝王の道は闇くおおわれて世に明らかにならず，ふさがって開かない（是故內聖外王之道，闇而不明，鬱而不發）」とあるが，內聖外王之道が闇く明らかでなくなる原因として，「物の分析による道の分裂」が擧げられていた。それは荘子においては①「是非の區別を無理にしない（不譴是非）」とあったように，萬物齊同の立場から是非の區別を放棄していることである。そして，內聖外王の體現者こそが道術の實現者でもあり，荘子をその最も相應しい繼承者であるとして結論づけているのである。

［二，「天下篇」荘子に後接する郭象「荘子序」］の章で述べたように，「天下篇」での各思想家に對する分析は，「物に對する追求」といった論理學的な側面では，彭蒙・田駢・愼到の「萬物を齊しくみることを道の基本と爲した（齊萬物以爲首）」という解說で一旦途切れている。それはそれ以後の思想家に於いては，萬物齊同が既に思想の根底に組み込まれてしまったからである。

従って老子では，再び提起することはせず，莊周では「是非の區別を無理にしない（不譴是非）」という言葉で表現している。そして，時々刻々と變化する萬物に對應したり，事物の性質を分析したりしようとするならば（其應於化而解於物也），その性質は把え盡くせず，引き起こされる事態も解きほぐせない（其理不竭，其來不蛻）。それだからこそ，「まだ充分に道を極め盡くしていない（未之盡者）」ものの，「莊子は物の本質を知っている者と言うべき（夫莊子者，可謂知本矣）」であり，「莊子は〔まだ萬物と言葉の概念とが一致できないでいる點では〕完全には道を體得しきれてはいないが，その言葉は至極なのである（然莊生雖未體之，言則至矣）」。

時々刻々と變化する萬物に對應したり，事物の性質を分析したりしようとするならば，その性質は把え盡くせず，引き起こされる事態も解きほぐせないのである[14]。また，時とともに移ろいゆく物の分析は極め盡くせるものではない。それは，「惠施」の中で說かれていることでもある[15]。

なお，網掛けのｆ「上は造物者〔である道〕は物ではない存在であることを知り，下は物が〔それぞれ〕自生自化することを知っている（上知造物無物，下知有物之自造也）」は，「內聖外王」の立場から離れ，郭象の「知足安分」（足るを知り性分に安んじること）を旨とする自得の立場で描かれているため，郭象の注文の混入と考えられる。「自造」は『莊子』本文中での用例は見當たらず，「齊物論篇」の郭象注の中で用いられている言葉である。注と本文とを併記していく方法は後漢以後に成立しているので，後世の郭象注本から注と本文を纏めて移したものと考えれば違和感は感じられない[16]。そして，「天下篇」莊子の後半部分に②「上は造物者と遊び，下は死生先後を忘れた者を友とする（上與造物者遊，而下與外死生無終始者爲友）」とあることから，「莊子序」の「上知造物無物，下知有物之自造也」はその注に當たっているものと考えられる。

一方，仕切り線から後の文章では，前半部分は『莊子』書中からの引用によって文章が構成されているものの，ｈ「眞心を盡くし，僞りのない行いは〔その人の持つ〕自然の輝きから發せられるといっている。その輝きを用いるならば，その〔人の本來持っている〕素朴な性質は自然と釀成されるのである。こうしたわけで〔天下を營爲できる無形無方の〕神の器は〔人間の力の及ばないものであるが〕，ただ〔深遠幽寂な〕道の世界でのみ生成變化し，その根元は奧深く遠いのである（用其光則其朴自成，是以神器獨化於玄冥之境而源流深長也）」とあるように，郭象の好む「獨化」という熟語で統括されている。またｈの後半に「そこで，途切れることのない波によって搖り動かされ，强靱な風に扇がれることによって，事物の性質や道理，規律に通達し，民意をくみ，質樸さを廣め，非常に苦しい狀態から解放される。感情の赴くまま歡樂を縱にするような仕事は無くなり，自分の能力をひけらかす者もいなくなるのである（其長波之所蕩，高風之所扇，暢乎物宜，適乎民願。弘其鄙，解其懸，灑落之功未加，而矜夸所以散）」とあるのは，「自成」・「獨化」といった郭象が多用する言葉から分かるように，郭象の意見そのものであり，前半部分に見られる「天下篇」との關わりは見られない。そして，ｉ「物欲にまみれた人であったり，出世欲に驅られた下級の役人であっても，暫く莊子の殘香を嗅ぎとり，溢れ出す思いを味わい，〔作中に描かれている〕音と形をぼんやりと思い描けば，豁然として自分の形體が自然と得られていることすら忘れてしまうような感慨に達することができる。ましてや莊子の遙かな思いに心を寄せ，永遠の生命を重視する者ならば尙更である（雖復貪婪之人，進躁之士，暫而攬其餘芳，味其溢流，彷彿其音影，猶足曠然有忘形自得之懷，況探其遠情而玩永年者乎）」に於いても，『莊子』を味わうことによって自然と自身を忘れ自在な胸中の思いに滿足するのだ，という郭象の「知足安分」の考えが色濃く出ているのであり，それは結論に置かれた「かくして莊子とは俗世から遠く離れ，俗塵と袂を分かち，本性に備わった分限に從って物と一體になる者なのである（遂綿邈淸遐，去離塵埃而返冥極者也）」まで一貫している。

また，郭象は「冥」を「物と一體になる」意に，「極」を「物にはそれぞれ持って生まれた性が有り，性にはそれぞれ本性に備わった分限が有る（物各有性，性各有極）」というように，「本性に備わった分限」と捉えている。そして，iの文中に使われている「永年」という語句は郭象の注には見られないが，六朝期の文獻に多用されており[17]，語句の用例からも，郭象注との關連を指摘することが出來る。さらに，「天下篇」篇首の後半部分や「天下篇」「莊子」の後半部分，郭象「莊子序」の結末部分ではよく練られた四字句が中心となって文が構成されているが，仕切り線より後ろの「故に」で始まる全ての網掛けの文章では，作風が大きく異なり，會話文に象徴されるように，自身の觀點・用語によって『莊子』に注解を加えている。用いられているテクニカルタームや語句を見る限り，「天下篇」との關連性は極めて薄く，文中では二重線を付した「自成」·「獨化」·「自得」といった郭象獨自の用語も使用されている。「內聖外王」が莊子本文と「莊子序」を併せても二箇所の用例しかないのに對して，「自成」は郭象注だけで十七箇所（『莊子』「讓王篇」にも一例用例はあるが，「自分の行爲」という意味で用いられているので，郭象が用いる「自成」とは意味が異なる。この例を除くと郭象注だけで用いられている語句と言うことになる），「獨化」は郭象注だけで十二箇所，「自得」に至っては郭象注だけで百十五箇所の多さである[18]。傍證とはいえ注視するべきである。

郭象「莊子序」は，前半で特に「天下篇」の內聖外王と關連する內容の說明に終始しているが，後半は，郭象獨自の思想によって『莊子』書の內容の說明に當たっており，純粹な「自序」というよりも，「序文」としての性格が强いようである。しかし古勝 所論の定義に從えば，他の同時代の「序文」とはやはり性格が大きく異なる[19]。後半は，むしろ注文の混入であると考えるべきであり，これまで僞作問題が解決に向かわなかったのも『莊子』の「序文」に郭象の注釋が混入している點に有るのではないかと思われる。そして，「故に曰く，義の適く所を知らず」以下の文は，郭象の「知足安分」の立場によって書かれ，明らかに前半と趣を異にしている爲，後半部分は，前半部分の內聖外王に對する後世の注であると考えるべきであり，『莊子』「天下篇」に後接するのは「放而不敖」までの部分と見るべきである。

また，後世注目されるようになった「序文」としての性格が强い「釋文序錄」や「高山寺本」に見られる「莊子序」こそが，おそらく本來の郭象「莊子序」であったのであろう。

まとめ

いくつかの原本『莊子』から，現行本『莊子』に近い形に編纂される前の段階では，「惠施」が「天下篇」の結語となるべき文章の前に入れられ，末尾の評語を付け加えることによって整えられたのだろう。なぜなら，「天下篇」の他の諸子では道術·方術に分け，その上で批判する手法を取っているのに對し，「惠施」については，一切そのような記述は見られないからである。また，「惠施」の末尾の評語は比較的長いものであり，「物」の分析と莊子の「道」の分析を對比させているのは，「天下篇」の主張する內聖外王の道から考えて違和感が殘る。「天下篇」の後半部分には，結語となるべき文章があるべきである。結論があってこそ，諸子の中で最も解說が短く，「未之盡者」で終わってしまっている不完全な文章を讀み換えることが出來，「物の分析」に對する結論も得られるのである。

そして，「天下篇」書中で中途半端な評價をされたまま文を終えていた「莊子」は，序文の中の言葉を足すことによって，內聖外王の道を明らかにする本來有るべき存在へと生まれ變わることが出來るのである。

それから，「天下篇」の中では孟子が取り扱われていない。『莊子』本文中に孟子が現れていないので，敢えて外したということも考えられなくはないが，「內聖外王」というと，王道を說いた孟子はやはり外せないと思われる。また，鄒魯に代表される儒家の思想に關しては，「天下篇」の冒頭にて元々は道術の一つであった旨，記載があるが，戰國期の諸子百家によって方術に分裂してしまい，その再統一のための內聖外王の道が說かれているのであるから，戰國期の莊子前後までの思想家として，孟子が擧げられていないのは不自然である。やはり莊子を內聖外王の完全な達成者であると考えていたからこそ，敢えて孟子を外したのであろう。

なお，君臣がそれぞれ生得的に得ている「性分」·「適性」は途中でその性を變えることは出來ず，自分に與えられた性分のまま生きるべきだと說くのは郭象であり，それはいわば「足るを知り分に安んず（知足安分）」といった郭象獨自の思想であり，「內聖外王」といった經世的意味合いの語句とは相反する考えである。「名敎自然」といった郭象を代表する思想であるが，その自然觀と外に王たらんとする外王の思想とは相反するものである[20]。

唐代の頃のテキストには，「注釋家の序文」として相應しい本來の郭象序（高山寺本所收の跋文）が殘されていた。しかし，恐らく前漢末に，「天下篇」の結論に當たる部分に「惠施篇」が加えられたこともあり，惠施の「物」の分析と莊子の「道」の分析の對比は，天下篇の主張する內聖外王の道から考えて矛盾し，內聖外王の體現者であり道術の實現者でもある莊子に對する結論が宙に浮いていた。そこで，唐宋の間に何者かが「未之盡者」より後の文を外し，郭象に假託して「莊子序」として卷頭に置いた。さらに，宋版『莊子』が版本として廣く流通するに隨って思想史的意味合いの强い郭象序は廣く認知されるようになっていき，反對にテキストの編纂に係わる內容を中心としている本來の郭象序は跋に追い遣られ，「天下篇」全體が跋文的な性格を兼ね備えていることから不要と見なされて刪去された。その結果，宋版以降のどの版本にも見られなくなってしまったのである。

何焯（一六六一－一七二二）の『何義門家書』卷二書中に，王安石の子の王雱（一〇四四－一〇七六）が當時まだ無名であったため，郭象に假託して「莊子序」を僞作し，宋版『莊子』の序文を刻したと記しているのに對し，王利器は景德三年に宋版『莊子』が刻印された時には，王安石の生まれた北宋の眞宗 天禧五年（一〇二一）まで十三年，王安石の子の王雱が生まれた慶曆三年（一〇四三）までは更に三十七年も距てていることから，後に別人であるとしている。そして『新唐書』「藝文志」丙部に王滂の『百里昌言』二卷があり，陳隋の間の人であるとされているのが其の人であるとする[21]。

この王利器の說は，郭象「莊子序」の僞作を疑う餘り，少々性急に過ぎているのではないだろうか。なぜなら，前述のように成玄英は「莊子」の「未之盡者」に對して，「莊子の書について言うと，上品で奧ゆかしく，ぼんやりとしてはっきりせず，耳目〔といった感覺器官〕では言い盡くせない。もしも言語現象によって求めようとするならば，其の趣を窮めることは出來ないのである（言莊子之書，窈窕深遠，芒昧恍忽，視聽無辯。若以言象徵求，未窮其趣也）」と解釋していることから，本來後接していたであろう郭象「莊子序」の一文―「莊子は〔まだ萬物と言葉の概念とが一致できないでいる點では〕完全には道を體得しきれてはいないが，その言葉は至極である（莊生雖未體之，言則至矣）」を見ていたと考えられるからである。また，「天下篇」全體に通じる「內聖外王」に對する解釋も「玄聖素王，內也。飛龍九五，外也[22]」とあり，郭象「莊子序」の一文―「靜かにひっそりとして動かない者と，後に必要に迫られて立つ（內聖と外王）兩者と間（寂然不動，不得已而後起者）」に沿った解釋となっている。恐らく成玄英の頃にはまだ郭象「莊子序」が「天下篇」から分離することなく，高山寺本所收の跋文が本來の郭象「莊子序」として

付いていた—少なくとも諸本の中にそうしたものがあったと考えられるのである。そして宋代眞宗時の僞作騷ぎから後，現行本の『荘子』郭象注本が唯一殘され，今日に至るまで無二の存在となり續けたのである。

後世，何焯によって郭象「荘子序」僞作の汚名を着せられた王雱ではあるが，道藏本に『南華眞經新傳』が殘されている。その序文中には「元豐中始得完本於西蜀陳襄氏之家」（元豐中 始めて完本を西蜀陳襄氏の家に得たり）—元豐年間は一〇七八－一〇八五年に當たる—とあることから，王雱の死後間もなくして發見されたものと思われる。そして，『南華眞經新傳』の「內聖外王」に對し，王雱は次のように注記している[23)]。

道藏於內則聖也。顯於外則王也。百家之術競起而殽亂。其道所以晦而不顯也。故曰內聖外王之道闇而不明。鬱而不發。天道既不明而不發世俗焉。能見其全純乎。又曰，後世之學者不幸不見天地之純，古人之大體。夫不見其全純者，是道之所以滅裂而諸子之言交起也。故復言道術將爲天下裂，而繼言諸子之異術。此荘子爲言言始終之序也。

道が內に藏まるのは聖人である。外に顯れるのは帝王である。（諸子）百家の（方）術は競い合って起こり混亂を生じた。それは道が闇くおおわれて世の中に明らかにならない理由である。こうしたわけで，「道を內に抱く聖人・それを外に用いて萬物を化育する帝王の道は闇くおおわれて世に明らかにならず，ふさがって開かない」といっているのである。世の中の道はもう明かにならず世の一般の人々に啓示することはない。道の混じり氣のなさを見ることができようかいやできまい。さらに，「後世の學者は不幸にして世の中の混じり氣のなさや上古の人々の道の大きな働きを目にすることはできない」といっている。世の中の混じり氣のなさを欠けることなく保持する者が現れなければ，これは道が離ればなれになり諸子の言葉が代わる代わる起こる原因である。だからふたたび「道術はいまにも世の中の人々によってバラバラにされようとしている」といい，言葉を諸子（百家）のそれぞれ異なる學說に繼いでいる。

冒頭の「內聖外王」の解釋は，成玄英の注に沿い，天下篇の語句を中心に構成していて，特に目新しさはないが，末尾に「ここでの荘子の〔內聖外王に關する〕言葉は始め（の序文）と終りの序文（である後序）を指して言っているのである（此荘子爲言言始終之序也）」とあるのに注視させられる。王雱の時には既に，卷頭に「內聖外王」を含む現行の郭象「荘子序」が置かれていたのであり，「天下篇」の「內聖外王」を『荘子』を締め括る後序として捉え，「內聖外王」—古の道術—との關係の薄い「惠施」とを分けて考えている事が分かるからである。又それは同時に，これ以後，現行の郭象「荘子序」附帶の『荘子』が固定されたものになっていくことを暗示しているのである。

以上，「天下篇」が本來あるべき荘子の後序としての役割を果たして居らず，非常に不本意な終わり方をしていることに對して，前半と後半とでは雰圍氣の異なる郭象「荘子序」の前半が，實は「天下篇」から外れた本文の一部分であると假定した。そして，郭象「荘子序」の前半が，「天下篇」の荘子の項目の後に後接していた可能性について纏めた。

當論文では郭象「荘子序」を中心に扱っている爲，「序文」としての性格が强い「釋文序錄」や「高山寺本」に見られる「荘子序」との比較は行っていない。また，郭象「荘子序」に現れている「自成」・「獨化」・「自得」といった郭象獨自の用語や「內聖外王」の使用例だけでは，十分な論證になって居らず，これだけでは判斷できないのではないかという反論もあるかもしれない。また，『荘子』は本來，非政治思想であり，荘周の考えは，そもそもが統治とは無緣の思想であるから，「內聖外王」を肯定する政治的立場で書かれていれば，政治思想を多分に含む老聃で頂點を迎え，荘周はそれより一段下の位置づけをなされるのは当然のことだ，という誹りを受けるかも知れない。周

知の如く，莊子「天道篇」には「玄聖素王」の語句が見られ，當該箇所にも政治的な一面が現れているが，「玄聖素王」はいわば「內聖」面に焦點を當てたものであって，「內聖外王」ほど積極的な姿勢は見られない。小者は，漢代初期に黄老思想が盛行したその前後，莊子學派が生き殘りをかけて政治思想を取り入れていった結果，益々政治的な一面を强化することとなり，このようなテクニカルタームが生まれたのだと考えている。

思想史的な展開を含め，今後機會を俟って，郭象「莊子序」に使用されている言葉の定義や，「釋文序錄」や「高山寺本」に見られる「莊子序」との比較を通じてより深く分析し，全く別の視點から再度，郭象「莊子序」を捉え直してみたい。

注

1）水野厚志『莊子』天下篇の「內聖外王」について（『東京國際大學論叢』言語コミュニケーション學部編，第十一號，二〇一五）九五頁・一一四頁。

金谷治は馮友蘭の『新原道』の諸論，「天下篇の作者は，中國古代の非常に立派な哲學史家で，又非常に立派な哲學鑒賞家・批評家でもある」を引用し，（馮氏は）天下篇の正當な價値を見出した殆ど唯一の人であろう」と絶贊している。金谷治「莊子」天下篇の意味―体系的な哲學的著述として（『文化』東北大學文學會編 十六卷六號，一九五二），四二八頁。

2）前掲「『莊子』天下篇の內聖外王について」九五頁。

聖人帝王の出現は「一」すなわち道に基づくが，聖人と帝王は內外の區別をもつものにすぎず，天道篇の論述に，「此れ（道）を以て上に處れば帝王天子の德なり。此れを以て下に處れば玄聖素王の道なり」とあるように，兩者は本質的には一體の概念である。

また，今の世の方術の士は，古人の把握した全一の道―古の道術―の中心に据えられた內聖面・外王面それぞれの過不足により一曲の士に墮落し，道とその明覺な働き方に一體化していけるものは少ない（寡能備於天地之美）といっているように「寡し」であっていないわけではなく，博大眞人とされる關尹・老聃や，內聖外王の體現者としての莊子の存在を暗示している。眞實の道を追究する內聖外王の學術は，天下の人々によって分裂されようとしているが，その寡いながらも繼承されている古の道術―內聖外王の道―の傳統と繼承のされ方を見ていこうというのが篇首の趣旨である。

3）水野厚志「郭象莊子序」の眞僞について（『東京国際大學論叢』「人文社會分野」第一號，二〇一六）。

4）武內義雄『老子と莊子』（岩波書店，一九三〇，一二八～一三〇頁）。前掲「「郭象莊子序」の眞僞について」。

5）本文の檢索には北原峰樹編『莊子郭象注索引』（北九州中國書店，一九九〇）及び劉殿爵・陳方正主編『香港中文大學中國文化研究所 先秦兩漢古籍逐次索引叢刊 子部第四三莊子逐字索引』（商務印書館，二〇〇〇）を利用した。

6）譚戒甫「現存莊子天下篇的研究」の當該箇所は次の通りである。

「天下篇」共六章，第一章是總論，第二至第六章是分論，章法极其謹嚴，呼應极其靈活，古籍中實不易見。但有一個缺點，僅有首而無尾，即沒有總結，很覺奇怪…中略…所以我認爲當時的「略要」，可能還有第七章來敘述莊惠各自的思想和辯論，并加以批判作爲總結的…中略…我又認爲這第七章，原文或不很長，比起第一章來，不免相形見拙…中略…或者後世注家不滿于原第七章的較遜，竟擅引單行的「惠施篇」來代替了。也許原第七章和「惠施篇」間有相似之處，故敢取彼以易此，這可能也是一個原因。譚戒甫「現存莊子天下篇的研究」（「哲學研究叢刊第五輯」『中國哲學史論文初集』，一九五九），七二頁。

「天下篇」篇中の惠施については，前掲『莊子』天下篇の「內聖外王」について」一〇八～一一一頁を參照。

7）篇首の總論について，福永光司は，いにしえの道術―內聖外王の道―の傳統と繼承の問題をはじめに提示した天下篇は，以上を序論として，この後 當代の思想界の山脈を檢討整理しながら，その傳統と繼承とを，墨翟から莊周の學問にそれぞれ指摘する。そして，前四者の學問を莊周の學問（道の哲學）と關連づけ，もしくは系列づけながら，莊周の哲學を古の道術の最も正統的な繼承，それの最も根源的本質的な把握として，最高の位置づけを行おうとするのが，いうまでもなく天下篇の作者の意圖であるとする。福永光司『中國古典選十七莊子（雜篇・下）』（朝日新聞社，一九七八）一九八頁。

8）水野厚志「郭象莊子注」からみた『莊子』刪定について—そのⅡ（大東文化大學漢學會誌，第四十一號，二〇〇二），五八頁。

9）郭象「莊子序」の眞僞については，先に拙論の中で青木五郎・古勝隆一兩氏の說を敷衍し，反駁する形で述べていったが，內容の面からも用いられている用語からも，郭象の作であるとみなす事は困難であると結論づけた。ここでは前揭の論考で擧げていない古勝隆一の說を敷衍しつつ，郭象と同時代の特色を持つ序文—いわゆる注釋家の序文—と郭象「莊子序」とを比較することによって，改めてその特異性を明示した。前揭「郭象莊子序」の眞僞について。古勝隆一「後漢魏晉注釋書の序文」（東方學報 京都大學 第七十三號，二〇〇一）一頁～四八頁。馮友蘭『中國哲學史新編』第四卷（人民出版社，一九八九）一九六頁。
（『東京國際大學論叢』言語コミュニケーション學部編，第十一號，二〇一五）九五頁・一一四頁。

10）穴澤辰雄は「古の道術とは，要するに白心を前提とした，いわゆる內聖外王の道のことであって，その遺說を傳えているのが白心篇の內容であると見て差し支えあるまい」とし，「（寬容の精神による）禁攻寢兵をもって外王の道とし，（人間本來の性情である）情欲寡淺をもって內聖の道とした—という趣旨ではあるまいか」とする。「天下篇」が『管子』「白心篇」に由來して成立したかどうかについては再考の余地があるが，「天下篇」中の宋鈃・尹文學派に對する內聖外王からの分析は妥當である。「<管子>四篇の思想について〈その四〉—<莊子>天下篇，宋・尹評との比較檢討—」（『東洋學論叢』十四，東洋大學文學部，一九八九），十七頁・三三頁。

11）前揭『莊子』天下篇の「內聖外王」について（2. 天下篇に於ける諸學派の思想と「內聖外王」）。
　張涅など一部の學者は「博大眞人」について，「內聖外王」を究極の目標にする上で，老子は內聖だけしか達成しておらず，眞人も「天下篇」に「萬物の眞實を離れない者を，至人という（不離於眞，謂之至人」とあることから至人にすぎず，究極の境地に達しているとは言えない」とする。このような見方をするのは，莊周の哲學を古の道術の最も正統的な繼承者と見做しているからである。張涅《莊子・天下》學術史意義札記（『浙江海洋學院學報』第十七刊三期，中國浙江海洋學院，二〇〇〇），二一頁。
　なお，關尹老聃の結語に當たる「可謂至極。關尹老聃乎，古之博大眞人哉」について，「可謂至極」（至極と謂ふ可し）を高山寺本では「雖未至於極」（未だ極に至らずと雖も）と逆の意味に取っていることは，夙に金谷治や天野鎭雄等先人によって紹介されている。中でも天野鎭雄は高山寺本の文が本來の本文であると推定し，造物者・無終始者を友として遊ぶ至上の存在である莊子は老子の上に置くべきだとする。前揭「莊子天下篇の意味—體系的な哲學的著述として」，四三三

12）郭慶藩撰・王孝魚點校新編諸子集成『莊子集釋』（中華書局，一九八五，北京五次印刷）。

13）前揭『莊子集釋』一〇六九頁，一〇九八～一〇九九頁，三頁。
「天下篇」の譯出については，前揭『中國古典選十七莊子（雜篇・下）』および前揭『莊子』天下篇の「內聖外王」について，を參照。

14）本稿の考え方とは異なるが，池田知久は「天下篇」の「惠施」について，惠施は「物」の分析では優れるが「道」の把握はできていないと最終評價を下しているが，これは莊周に對する評價と正反對であり，至極の關尹・老聃の後に，正反對の長所と短所を持つ莊周と惠施を一對で收めるというのが，作者の構想として當初から有ったとする。
　また，池田氏は「正反對の長所と短所を持つ莊周と惠施を一對で收めるというのが，作者の構想だったのではなかろうか」と述べるが，「天下篇」の內聖外王の道にとって，弊害となっていることそのものが，行き過ぎた物の分析であることから，池田氏の論には無理がある。やはり，何らかの意圖で本來あった文が外れるか外されるかし，結果として「正反對の長所と短所を持つ莊周と惠施のペアーが收められた」と考えるのが自然である。なぜなら「天下篇」で主張しているのは，道術が「一曲之士」としての方術に墮してしまった要因は物の分析にあるが，その物の分析を乘り越え，萬物齊同を體得した莊子が，道を言辭によって表現しようとすることに對する評價とその限界を述べているのであって，物の分析に對しては終始一貫して酷評しているからである。前揭『莊子（下）全譯注』一〇九八～一〇九九頁。

15）「天下篇」惠施に，「逐萬物而不反。是窮響以聲，形與影競走也。悲夫」（萬物を逐いて反らず。是れ響きを極むるに聲を以てし，形影と競ひ走るなり。悲しいかな）とある。前揭『莊子集釋』一一一二頁。

16）後漢以降，注釋書に序文が書かれるようになる現象は，學問が前漢的な學派から離れ，書物がそれ自體流通するようになる當時の學術史的な動向の中から生まれてきたものと考えられるが，經書の經文と注

が結びついて一つの書物をなすという形式も前漢以來のものではなく，注釋書の序文の發生と時を同じくして後漢の半ばころから始まったらしい。前掲「後漢魏晉注釋書の序文」四二～四三頁。

17）青木五郎「郭象〈莊子序〉私箋」(『京都教育大學紀要』A，人文・社會五五, 一九七九)，一八四頁。

18）前掲『莊子郭象注索引』及び『莊子逐字索引』を利用した。

19）この時期の序文に共通する要素として，原著が著された經緯，原著者の傳記，原著の書名に關する說明，傳承や注釋の歷史への言及，自身による文獻整理や辨僞の記錄，注釋の動機についての說明，讀者に向けてのメッセージの要素がそれぞれ確認できるが，「莊子序」については，ほぼ全てが當たっていない。前掲「後漢魏晉注釋書の序文」,「郭象莊子序」の眞僞について

20）張泰年 主編の『中國哲學大辭典』所収「名教卽自然」の項目には，「名教卽自然，又指內聖外王之道」とあるが，郭象の自然觀は本文で述べたように「知足安分」を主眼とするものであって，「內聖外王」の「外王」と相容れるものではない。張泰年 主編『中國哲學大辭典』(上海辞書出版社，二〇一〇)，一六六頁。

21）王利器「再論『莊子」郭象序的眞僞問題（『曉傳書齋文史論集』，香港中文大學，一九八九)，二一二頁。

22）『莊子集釋』一〇七一頁。「飛龍九五」は『周易』「乾・文言』の九五。「飛龍在天。利見大人」(九五。飛龍天に在り，大人を見るに利（よろ）し）であり，「文言傳」に「飛龍在天，上治也」(飛龍在天とは，上に在りて治むる也）とあるように，聖人が上・天子の位にあって，下・萬民を治めることをいう。鈴木由次郎『周易 上』(全釋漢文體系卷九，集英社，一九七四）八六～八九頁。

23）『南華眞經新傳』(『道藏要籍選刊』二，上海古籍出版社，一九八九)，七七九頁・八九二頁。

参考文献

赤塚忠（1974）『全釋漢文大系16　莊子上』集英社
赤塚忠（1980）『全釋漢文大系17　莊子下』集英社
池田知久（1983）『莊子上』學習研究社
池田知久（1986）『莊子下』學習研究社
王先謙（1974）『莊子集解』臺湾・三民書局印行
郭慶藩 撰（1961）『新編諸子集成 莊子集釋』中國北京・中華書局
周啓成 校注（1997）『莊子虞齋口義校注』中國北京・中華書局
服部宇之吉 校訂（1911）『莊子翼』冨山房
福永光司（1966）『中國古典選7　莊子 內篇』朝日新聞社
福永光司（1966）『中國古典選8　莊子 外篇』朝日新聞社
福永光司（1967）『中國古典選9　莊子外篇 雜篇』朝日新聞社
方勇 撰（2012）『莊子纂要』中國北京・學苑出版社
牧野謙次郎（1914）『漢籍國字解全書 莊子上』早稲田大學出版部
牧野謙次郎（1914）『漢籍國字解全書 莊子下』早稲田大學出版部

経営学ケースメソッド実践者の考える内省とは
――日本語教育版ケースメソッドの開発を目指して――

アドゥアヨム・アヘゴ　希佳子

What Does Reflection Mean to Case Method Instructors on Management Studies?: Aiming to Develop the Case Method for Japanese Language Education

ADUAYOM-AHEGO, Kiyoko

Abstract

The case method is a teaching method in which students learn through discussions of case materials. It began in the field of management studies in Japan. To develop the case method for Japanese language education, it would be preferable to create a new version of this method with minimal revisions from the method used in management studies. As the first step toward this goal, this study elaborates on "reflection" based on two interviews with two instructors who use the case method in management studies. The data were analyzed according to three factors: the reason there is not reflection time in class for the case method in management studies, the importance of reflection, and specific ways to encourage reflection. Results show that it is generally considered to be impossible, of questionable necessity, and difficult to encourage students to reflect effectively in their classes. However, the interviewees set a high value on reflection as a goal of their classes and as an efficient record, and introduced several ways to encourage reflection. In sum, it can be inferred that the importance of reflection in the case method might have been misunderstood in Japanese language education. To create a new version of the case method in Japanese language education, reflection must be wider and deeper.

Keywords: case material, case method, case learning, discussion, reflection

目　次

1. はじめに
2. 経営学CMの理念と方法
3. 日本語教育におけるCMの歴史と現状
　3.1　日本語教育におけるCMの歴史
　3.2　日本語教育におけるCMの現状
4. 目的
　4.1　日本語教育版CMの開発
　4.2　内省に関する考察の必要性
5. 方法
　5.1　インタビューの詳細
　5.2　分析方法
6. 分析結果
　6.1　経営学CMにおける授業内の内省の排除
　6.2　経営学CMにおける内省の重要性
　6.3　経営学CMにおける内省のための具体的な試み
　6.4　小括
7. 日本語教育版CMにおける内省の扱いへの示唆
　7.1「内省とは何か」の再考
　7.2　内省の具体的な方法の検討
8. おわりに

1. はじめに

ケースメソッド（case method，以下，CMと記す。）は，「ケース教材をもとに，参加者相互に討議することで学ばせる授業方法」（竹内2010，p. 18）である。CMの起源はちょうど100年前の1922年米国ハーバード・ビジネス・スクール（以下，HBSと記す。）にある（竹内2013）。HBSは，ハーバード・ロースクールにおける，判例研究を用いた模擬裁判などの討論授業を参考にし，経営事例を用いた討論授業を開発した。それを日本に導入したのは，慶應ビジネススクール（以下，KBSと記す。）の教員たちである。実際にHBSの教員教育プログラムで学び，「慶應型CM[1)]」を確立させた。CMはそこから他大学の経営学，そして医学や法学，教育学などの他分野へと広まっていった。筆者の専門とする日本語教育においても，近年CMが活用されている。本研究では，慶應型CMを中心とした経営学CM[2)]の理念と方法を深く理解した上で，日本語教育版CMを開発していくことを目指し，CMにおける内省について，経営学CM実践者に対するインタビュー調査をもとに考察することとした。

2. 経営学CMの理念と方法

竹内（2010）によると，経営学CMは伝統的な講義形式とは異なる。教材として用いられるのは教科書ではなく，経営に関する客観的事実，特に問題発生の状況や背景が述べられたケース教材である。この教材をもとに，参加者が主体となって相互に討議を行い，教師はディスカッションリーダー（以下，DLと記す。）として討議の舵取りを行う。学習目的は，既存の知識の獲得では

なく，「自らのよりどころとする知見を編み出す能力や態度を獲得すること」（竹内 2010，p. 23），端的に言えば，自己モデル[3] の更新であり，人間形成である。また，重視されているコンセプトは，「学びの共同体」「勇気・礼節・寛容」「温かいムード」「学生と盟友になる」という4点（竹内 2010）であり，協働学習を重視している。つまり，経営学CMは，数多くある教授法の中で，活動型の協働学習によって，自己変容を促す教授法の一つであると位置付けられる。

経営学CMのプロセスは，個人予習，グループ討議，クラス討議の3ステップから成る。竹内（2010）によると，慶應型CMの典型的な例としては，まず，個人予習として，ケースを読んだ上でディスカッション設問（問題の原因や，解決方法に関するもの）に対して自分なりの意思決定を行う。これには通常3時間前後を要する。次に，10名程度の小グループで90分間グループ討議をすることにより，自分の考えを他者に伝える練習をするとともに，他者の反応を手がかりに，自分の考えを吟味する。最後に，クラス討議として，各グループ計60名程度が一堂に会し，教師がDLとなって，90分間意見交換を行う。その際，教師は「教えるべき正解」を持っているわけではなく，参加者各自が討議を通じて自らの正解を構築するよう求められている。1日に2ケース，2年間で300 ～ 400ケースに取り組むという。人数や時間配分などは異なるとしても，これが経営学CMにおける一般的な手順となっている。

3. 日本語教育におけるCMの歴史と現状

3.1　日本語教育におけるCMの歴史

日本語教育において，最初にCMに注目した人物は，梅津光弘である。梅津（1997）によると，80年代以降，日本語教育において台頭したコミュニカティブ・アプローチにおけるコミュニケーション能力とは客観的／間主観的なものであり，学生の会話達成感という主観的満足感を高めることにつながらないという問題があった。これに対し，CMは，唯一の正解や模範解答を求めるものではなく，「自己の内面的価値構造を想起･活性化させる」（梅津 1997，p. 109）ものであり，「ひとりひとりの問題意識や知識レベルに応じた多様な満足感／達成感に至ることができる」（梅津 1997，p. 109）と主張した。その梅津が，1998年にビジネスコミュニケーション研究会に招かれたことにより，その後，日本語教育においてCMの発展を牽引することになる近藤彩が，CMと出会うこととなった（近藤 2015a）。

近藤は，CMを「ケース学習」という，日本語教育においてより扱いやすい形態へと発展させた。ケース学習とは，「事実に基づくケース（仕事のコンフリクト）を題材に，設問に沿って参加者（学習者）が協働でそれを整理・討論し，仕事場面を疑似体験しながら問題解決方法を導き出し，最後に一連の過程について内省を行うところまでの学習である。」（近藤 2015b，p. 6）と定義されている。近藤がケース学習を用いる理由は，日本語学習者が教科書の会話や語彙を暗記し，「日本語ができる」人材になるのではなく，仕事をする上で重要な能力である課題達成能力，情報整理力，交渉力・説得力，分析力，問題解決能力，人間関係能力，異文化適応能力，協働力，統合力を育成し，「日本語で仕事ができる」人材になることが重要であるからだとしている。そのためには，実際に仕事で起こっている問題を教育現場で取り上げることが必要であり，解決策を求めて複数の能力が育成されるケース学習が適切であるという考えに至ったという。経営学CMに対して具体的に修正を加えた点としては，ケース教材を短く簡潔にし，語彙表を設けたこと，内省を重視し，授業内に内省の時間を設けたことなどが挙げられる。

また，近藤とともに教材開発を行ってきた池田玲子は，元勤務校において開発教育のワーク

ショップに参加したことがきっかけでCMに出会い，KBSにおいてCM教授法セミナーを受講した。CMの，討論から学ぶという形式，「学びの共同体」という学習環境の構築，「非指示的に教える」という教授観が，自身の専門であるピア・ラーニング（池田・舘岡 2007）と酷似していることから，CMに興味を持ったという。そして，全体討論の方法を変える，内省の時間を設けるといった独自の修正を加えた[4]（池田 2015）。

このように，CMは形を変え，主にビジネス日本語教育の分野で受け入れられることとなった。

3.2　日本語教育におけるCMの現状

教材としては，ビジネス日本語教育の分野で3冊（近藤他 2013，近藤他 2019，金他 2020）出版されている。そのうち近藤他（2013）に関しては，教材作成過程や実践の報告が数多くなされている（近藤 2014，近藤・金 2014など）。近藤他（2013）の教材作成過程では，ケースの選定のために，日本人とインド人のビジネス関係者にインタビュー調査を行い，仕事上に生じた問題点やコンフリクト（摩擦）及び仕事上の工夫について，内容分析を行ったという。その結果選定された10のケースが，語彙リスト，タスクシート，「ケースの裏側」（補足説明，討論のためのヒント）とともに教材化されている。例えば，「ほう・れん・そう⁉」というケースでは，インドで駐在員として勤務している日本人が，インド支社内の報告・連絡・相談の体制が整っていないことにより，現場の状況を把握できずに困っているという具体的なシチュエーションが提示されている。それらのケースを用いて，90分の授業が行われている（近藤・金 2010，2014など）。授業の流れとして近藤他（2013）で挙げられている例は，アイスブレーキング・グループ分け（3分），ケースを読み，タスクシートに沿ってメモを作る（15分），グループ討論（25分），全体討論（30分），DLからのフィードバック[5]（10分），ロールプレイ（7分），振り返りとしての内省シートへの記入（宿題）という手順である。このうち，ロールプレイは必須ではない。授業ではグループ討論と全体討論を中心にし，ほかのものを予習や宿題に回すこともあるという。

このような実践により，問題の所在を把握し，人物の立場に立って考える，自分の経験・自文化と照合する，討論を通じてそれぞれの「解決策」を見出す，といったことが可能になったと報告されている（近藤・金 2010）。

ビジネス日本語教育以外の分野でも，異文化コミュニケーションを学ぶ留学生用の教材として宮﨑（2014）が出版されているほか，近年では日本語教師養成の分野でもCMが用いられてきている。

4. 目　的

4.1　日本語教育版CMの開発

以上のように，主にビジネス日本語教育の分野において，近藤や池田を中心に経営学CMに修正が加えられてきた。では，彼女らのケース学習をもとにそれぞれの日本語教育研究者・実践者がさらなる修正を加え，ほかの分野に応用していくという方法は，果たして望ましいのであろうか。近藤は，ケース学習を開発する際に，経営学CMに加え，ウォーレンシュタインの「対話的問題提起学習」という教育方法をも基盤とした（近藤他 2019）。また，池田は経営学CMをピア・ラーニングの観点から修正した。つまり，2で述べたような経営学CMの理念と方法をできる限り踏襲しようとしたのではなく，独自の視点で積極的に修正を加えていったというわけである。これにより，日本語教育研究者・実践者や日本語学習者にとってCMが受け入れやすくなり，CMの普及に

つながったことは確かである。しかし，近藤・池田をはじめとする日本語教育におけるCMと経営学CMの相違点は，アドゥアヨム・アヘゴ，鈴木（2022）において指摘されている。現時点で日本語教育研究者・実践者がCMのモデルとして参照するのは，主に近藤・池田らのものであり，それをもとに更なる修正を加えていくとなると，次第に経営学CMの原型とはかけ離れたものがCMという名のもとに独り歩きすることになるのではないかと危惧される。ケース学習を，そしてCMをより深く理解したいのであれば，まず経営学CMについて学ぶ必要があるのではないか。無論，経営学CMが無謬の聖典であるわけではない。継承すべき点とそうでない点を精査する必要がある。その点も含め，一度経営学CMに立ち戻った上で，ケース学習とは異なる日本語教育版CMを開発し，日本語教育研究者・実践者たちが参照できるCMの原点を形として残すことにより，日本語教育におけるCMをさらに発展させていくことができるのではないかと考えた。

そこで，筆者はKBSにおいて2011年から一般向けに開講されている「CM教授法セミナー」を2021年春に受講し，慶應型CMの理念と方法を学んだ。そのセミナーの担当講師2名に対してインタビューを行うことにより，日本語教育版CMの開発プロジェクトへの第一歩を踏み出すこととした。

4.2　内省に関する考察の必要性

今回，経営学CMを理解するための切り口としたのは，内省（reflection）である。内省とは，「個人が自分の体験について新しい理解や評価を見出すために，その体験を対象としてそこに何があるかを探る認知的・情意的活動である[6)]」（金2008，p. 2）。2. で示したように，経営学CMでは授業内に内省の時間が設けられていない。髙木･竹内（2006），竹内（2010），バーンズ他（2010）といった関連書籍においても，内省に関する記述はほぼない。しかし，3.1で言及したように，近藤と池田はともに内省を重視し，内省の時間を追加した。近藤はケース学習とCMとの違いについて次のように述べている。「ケースメソッドでは内省が重視されていません。これに対し，議論をしていく過程で，自分の考えがどのように変わったか，どのような意見に触発されたか，など自らの変化を振り返ることまでを学習と位置付けたのがケース学習です。」（近藤 2015c, p.87）。また，池田は，KBSのCM教授法セミナーを受講した際に，「振り返りセッションは，一方的に講師フィードバックを受け止める場でしかなく，フィードバックを受けた後の学習者個人の内省の場は設定されていなかった。」（池田 2015，p. 27）という点に違和感を覚えている。そして，具体的には，近藤は内省シート[7)]への記入を，池田は討議内容をふまえて個人予習課題を加筆修正するという内省活動を加えた。その理由として，近藤は「ケース学習の終わりには，個々人が一連の学習プロセスを振り返る時間を持つことが大切です。」（近藤 2015c，p. 84）と述べ，池田は「個人内省を明確に授業プロセスの中に位置付けることで，学習はより動機付けられ，次の学習ステップへと進んでいくことができるはずである。」（池田 2015，p. 28）と述べている。

では，なぜ日本語教育ではそれほどまでに内省が重視されているのであろうか。金（2008）によると，講義形式の知識伝達型の授業であれば，教える側が知識を分析，構造化し，効率的に伝達することになる。しかし，自律的学習の場合は，学習者自らが体験や活動の中で知識の概念化を行う必要がある。その知識（観点）の生成のために必要なのが，内省であるということである。実際，日本語教育では，CMとは関係のない数多くの実践においても，内省が重視されている（淺津 2019，金 2019など）。

では，なぜ経営学CMでは授業内に内省の時間が設けられておらず，内省に関する記述もほとんどないのであろうか。筆者はこの点に着目し，以下の研究課題を設けた。

研究課題1．経営学CMにおいて，内省が授業内に組み込まれていない理由は何か
研究課題2．経営学CMにおいて，内省は重要だと考えられているか。その理由は何か
研究課題3．経営学CMにおいて，内省を行うための具体的な試みは何か

以上の研究課題を通して，経営学CMにおける内省について考察し，日本語教育版CMへの示唆を得ることを本研究の目的とした。

5. 方　法

5.1　インタビューの詳細

所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得て，経営学CM実践者である竹内伸一（以下，竹内と記す。）及び丸尾聰（以下，丸尾と記す。）に対して半構造化インタビューを行った。竹内は，HBSからCMを持ち帰ったKBSの髙木晴夫の一番弟子であり，慶應型CMの後継者として，現在名古屋商科大学のビジネススクールにおいて日々実践を行う傍ら，KBSのCM教授法セミナーを担当し，慶應型CMの普及に努めている。一方の丸尾は，約10年前にKBSのCM教授法セミナーを受講し，慶應型CMを学んだ後，事業構想大学院大学の教授となり，慶應型CMに独自の改良を加え，日々経営学CM実践を行っている。インタビューは，竹内に対しては110分，丸尾に対しては90分，Zoomというウェブ会議ツールを使ってオンライン上で行い，録画・録音を行った。

インタビューでは，慶應型CM，経営学CMやケース学習に対する意見を聞き出すために，経営学CMとケース学習における主な相違点である内省，討議の方法，ケース教材という3点について，事前に提示しておいた質問項目をもとに，自由に語ってもらった。本研究では，3点のうち，内省に関する語りのみを分析対象とする。発言を引き出しやすくするため，KBSのCM教授法セミナーを受講した経験のある日本語教育研究者1名にもインタビューへの参加を依頼し，日本語教育研究者の立場からの質問や発言を促した。

5.2　分析方法

インタビューデータは，逐語的に文字化を行った後，公開不可の箇所や意図が伝わりにくい箇所について，竹内・丸尾の指摘をもとに修正した。その後，質的研究で行われている一般的な手順である，「データの切片化→ラベル付け→カテゴリー化」という手順で分析を行った。まず，データの切片化においては，萱間（2007）に基づき，重要箇所に下線を引いた。重要箇所は，研究課題ごとに以下の基準で判断し，ラベル番号を振り，ラベルを付けた。ラベルの付け方に関しては，戈木（2005）を参考にした。

研究課題1．授業内に内省をしない理由に実線，その詳しい説明に点線
ラベル番号A00x（竹内），a00x（丸尾），ラベル【　】
例

授業時間というのが限られた時間じゃないですか。で，その限られた授業時間に対して，我々が教育活動としてやりたいことはもっと多岐に亘っていると。そうすると，そのどの部分を授業時間の中におさめ，どの部分は授業時間から掃き出すかっていうようなことを考えますよね。で，その考え方に従って，A001【授業の時間的制約】内省の時間は授業時間から掃き出されたんだと思います。これは海外のビジネススクールの授業でも日本のビジネススクールの授業でもあまり変わらないかなって思うんですね。

研究課題2．内省が重要である，もしくは効果がある[8]と考えている理由に実線，その詳しい説明に点線

ラベル番号B00x（竹内）, b00x（丸尾），ラベル【　】

例

> やっぱり伸びていく人っていうのはその意気込みと振り返りの，紙の上半分下半分で書いてもらってるんですけど，それのやっぱりねb001【成長の可視化】成長の軌跡が見えるんですよね。それの効果，それはケースメソッドの効果と分けて考えられないんだけど，でも明らかに本人がやっぱり成長の実感はしてるんじゃないですかね。

研究課題3．内省のための試みに実線，その詳しい説明に点線

ラベル番号C00x（竹内）, c00x（丸尾），ラベル【　】

例

> 僕はビジネススクールの学生にはこういう言い方するんだけど，C001【将来の自分への手紙】将来の自分に申し送りをしろ，手紙を書けって言うんですよね。今日は自分で授業でこういうことを勉強してこんなふうに思った，でもすぐに次の予習に入んなきゃいけないんだと。俺には時間がないと。だからせめて 5 年後の君に，みたいなね，3年後の君に，みたいなね。この続きを考えてくれ，これについてどう思うかまた考え直してくれ，みたいな将来の自分に手紙を書くっていうの，よく言うんですよね。それは授業時間内でやるかどうか，授業後すぐにやるかどうかはそこまでは細かく言わないけれども，なにしろ揮発するわけですよね。それをこう将来の自分に，ノートをどうやって取ればいいんですかみたいなことを久しぶりに勉強する人はいろいろ聞いてくるんだけど，黒板なんか写さなくていいぞ，と。自分がどう思ったか書いとけ，将来の自分になんか申し送りをするようなことを書け，みたいなことを言うようにしてるんですよね。

次に，戈木（2005）を参考に，意味の近いラベルをグルーピングし，カテゴリー化を行った。小カテゴリーは＜＞で，大カテゴリーは≪≫で示した。

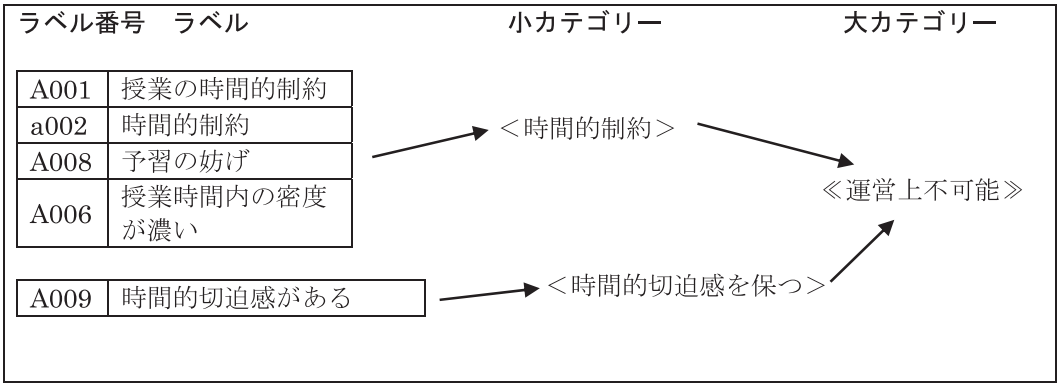

図１　グルーピング及びカテゴリー化の例

6. 分析結果

6.1　経営学CMにおける授業内の内省の排除

研究課題1では，竹内・丸尾が，経営学CMにおいてなぜ内省が授業内に組み込まれていないのかという点について一般論を述べた部分を取り上げる。

竹内からは16，丸尾からは5つの【ラベル】が生成され，10の＜小カテゴリー＞，3つの≪大カテゴリー≫に集約された。≪運営上不可能≫≪授業内での必要性への疑問≫≪授業内で本当の内省が難しい≫という3点に分け，インタビュー内容を要約しながら説明していく。

6.1.1　≪運営上不可能≫

両者が挙げていたのが，＜時間的制約＞である。一般的な経営学CM授業のクラス討議90分の中で，教育活動として行いたいことは多岐に亘っており，その限られた時間を内省に使うのはもったいないという意見があると述べていた。現在，平日に毎日授業を行うビジネススクールは減少傾向にあり，平日の夜や土日に集中授業を行う形式が主流になっている。そのため，授業時間の密度が非常に濃くなり，内省は弾き飛ばされてしまうという。授業終了後にレポートを書かせたり，授業内容を踏まえて自分はどういう振り返りをし，どういう決意を固めているかといったことを書かせたい気持ちはあるが，そうすると，通常7～8時間かかる[9]とされている次回の授業の予習の妨げになると大学の教務が憂慮しており，なるべく振り返りはしないようにと言われているという。[10]時間的制約の中で「個人予習→グループ討議→クラス討議」という必須の3ステップを優先させるがゆえに，任意の内省は排除されているといえる。

竹内はCM授業をパリコレに例えている。毎回の授業は，パリコレでモデルが次から次へと服を着替え，ステージを歩き，舞台から帰ってきたらすぐ脱いで，すぐ次の服を着てまた歩くというような時間的切迫感を持っているということである。しかし，このような時間的切迫感は，多忙な中で情報を処理し，決断を下す経営リーダーにとって必要な修羅場体験であり，[11]ゆったりとした内省の時間を確保するために授業の時間配分を見直すというよりも，内省の時間は加えずにこの＜時間的切迫感を保つ＞ことを優先しているのであろう。

以上のように，内省は≪運営上不可能≫であるため，授業内から排除されていた。

6.1.2　≪授業内での必要性への疑問≫

丸尾は，＜討議自体が内省＞になっているために内省の時間を設ける必要がないのではないかという点について述べた。丸尾が通常担当している授業はクラス討議に180分使っており，90分を経過した頃に自分の今の仕事のやり方が否定される意見などが出現し，100分から120分辺りでケースの論点が自分たちの会社へと自然に移っていくという。通常は6.1.1で述べたように，内省のための時間的余裕はないが，授業時間が長い場合は，討議自体が，自然に自分を振り返り，内省する場になるということである。

一方，竹内は，ビジネススクールの学生は社会人が多く，年齢層が比較的高いという点に注目して次のように述べた。まず，大人であるため，内省の時間を設けなくても＜学生は自力で内省できる＞。大人は授業内でなくとも，自分にとって最適のタイミング，方法，場所で内省をするものであると教員は期待している。それ故，授業時間は他者との協働でしか行えないことに使うべきであり，内省は自力で一人ですればよいということになる。大人の内省というのは，授業者が場や時間を設けて行うという種類のものなのか。この疑問は，＜内省を強制することへの疑問＞へとつながる。ビジネススクールの授業は成績獲得競争のような一面をどうしても帯びてしま

うため，成績に考慮されず＜学生にとって価値が見出しにくい＞内省というものの重要性を教員が説明したとしても，学生はその重要性，必要性を受け入れないのではないか。また，内省の価値が分かる学生と分からない学生がいる場合に，分からない学生に内省を強制することが果たして教育なのか。そういった疑問が生じるという。例えば，他者を論破することに喜びを感じる学生は，内省の価値を分かっていないと思われる。しかし，教員はその価値を分からせる責任をどれほど負っているのか。学生自らが内省とは別のところに分かりたいものを持っており，そこに向かって突進している時に，その方向性を曲げるよう強制することが教育なのか。本来，CMの目的は形式陶冶，つまり人間形成にある。CMを行うからには，人間形成という次元での教育を妥協するわけにはいかないし，社会人学生がすでに大人だといえども，形式陶冶を全員に求めている。しかし，学生本人が自らを一層陶冶すべきだというところに関心を示さなくても，また，授業中の発言の中に人間形成上の不十分さが残っていたとしても，そのことを特段に指摘したり，改善を強く求めるといったことまでは滅多にされていない。年齢層が高く，仕事をしながら通う学生に対して，人間形成を目的として深く＜内省にまで立ち入ることへの疑問＞を持つ教員がいるのである。そこには教員の勇気不足という批判もあるかもしれないが，それが社会人教育の現実なのである。このように竹内は述べていた。

以上のような理由から，内省の≪授業内での必要性への疑問≫が生じ，排除されているといえる。

6.1.3　≪授業内で本当の内省が難しい≫

授業内における内省の難しさは，時間内に内省が完了しないという問題と，方法が難しいという問題に分けられる。

前者に関して，両者は＜内省する段階は授業より後＞だと述べていた。丸尾は，CM授業は討議が深まるまでの立ち上がりに時間がかかるために，クラス討議が90分の場合は授業の最後に無理に内省させても消化不良で終わり，意味がないと感じられるという。一方の竹内は，「解凍･移動･再凍結」を例に挙げて説明した。これは，Lewin（1952）の「解凍・移動・再凍結（Unfreezing, Change, Refreezing）」という3ステップを指す。竹内（2010）によると，自分の凝り固まった頭を柔らかく解きほぐし（＝解凍），自己モデルを望ましいものに修正・変更し（＝移動），最後に新しい自己モデルを定着化（＝再凍結）することにより，自己モデルを更新することがCMにおける学びである。しかし，この全過程は必ずしも90分で完了するわけではなく，学期の最終回の授業で完了することもあれば，卒業後5年経ってから完了することもあるという。解凍から移動に進むためには反省がないといけないが，結局再凍結できず，また解凍前の状態に戻ることが多いと竹内は述べる。本当の内省というのは解凍・移動・再凍結が終わり，その再凍結後の安定状態にきちんと入り，以前の解凍前の自己モデルを懐かしく思い出せるぐらい解凍・移動・再凍結が進んだ時に可能となるのだという。＜内省する段階は授業より後＞であり，授業内では難しいのである。

次に，竹内は＜内省の促し方への疑問＞という，内省の方法の難しさについて述べた。例えば，週末にその週の授業を振り返るという方法もあるし，一学期15回の授業を行い，試験の答案を返却する際に，教員が約90分を使って1科目分の振り返りをすることも内省の時間になっているといえる。内省は毎時間，あるいは毎日しなければならないのか。「はい，じゃあ今から内省の時間ですよ，はいどうぞ！」と言えば内省が促されるのか。そういった疑問があると述べた。

一方の丸尾は，＜内省を教員が誘導する危険性＞に言及した。学生は，内省が深まっていなくても内省したふりをする場合がある。また，内省が教育目的に引きついていないと納得しないというような教員であれば，学生に内省を押し付ける場合もある。このように，授業における内省の促し方は難しい。

以上のように，≪授業内で本当の内省が難しい≫というのも，授業内に内省が組み込まれない理由の一つになっている。

6.2　経営学CMにおける内省の重要性

6.1では，内省が授業内に組み込まれていない理由を述べたが，これは経営学CMにおける一般的な考え方であり，両者は個人的には内省は重要であると考えていた。内省はなぜ重要だと考えているのかという点について，竹内からは5つ，丸尾からは8つの【ラベル】が生成され，6つの＜小カテゴリー＞，2つの≪大カテゴリー≫に集約された。≪内省という行為自体が重要≫≪内省された記録が重要≫という2点に分けて説明していく。

6.2.1　≪内省という行為自体が重要≫

6.1.3で述べたように，本当の内省を行うことは難しいため，内省の価値理解に辿り着ける学生は限られている。しかし，竹内は，内省は＜難しいから重要＞なのだと述べた。より多くの人がその価値が分かるようにすることも一つの方法であるが，誰もが価値を感じることよりも，限られた人にしか価値が感じられないもののほうが価値が大きいともいえる。内省は価値が見出しにくいものだからこそ，意味があるのではないかとのことである。

また，両者は，＜内省が授業の目的＞であるから重要であると述べた。竹内は，内省をさせないのであればこのような討論授業をする意味はどこにもないというほど内省は重要であるという。内省してもらう道具立てとして個人予習をさせ，グループ討議，クラス討議をして，DLが最後に何か言うということを繰り返しているわけであり，授業では内省が最も重要であるという。その理由は，人間形成がCMの目的であるためである。6.1.2で述べた＜内省にまで立ち入ることへの疑問＞という一般論に対して，人間形成に触れないのであれば，CMをやる意味はない，つまり抵抗感がある学生がいるとしても，内省にまで立ち入るべきで，そこが最も重要であると述べた。

一方の丸尾は，ケースを自分事として考え，実践することが授業の目的であるから内省が重要なのだと述べた。CM授業では，「気づいた，よかった」ではなく，ケースを自分の生活や会社に置き換え，実生活で実践しなければ意味がないという。そして，そのようにして行った内省は，新たな学びをもたらす。例えば，内省の時間に，過去の授業での個人予習課題の設問の意図や，クラスメイトの発言の意図に気づくというように，クラス討議の時点で気づかなかったことに気がつくことは多いという。また，丸尾は授業の終わりの15分に内省の共有の時間を設けている[12)]が，内省している他人の意見によってさらに内省が深まるという構図が多くあるという。このように，＜内省によって学ぶから重要＞なのであり，実際，きちんと内省している学生はCM授業で学んだことが身についているということを実感しており，内省は「未来永劫やめないと思いますよ」と丸尾は述べた。

また，内省するスキル自体も学びとなる。6.1.1で述べたように，ビジネススクールのCM教育は時間的切迫感のある慌ただしいものとなっている。経営リーダーはそのような状況下において自分にとって価値のある内省をいかに記録できるのか。竹内は，そのような＜内省するスキルが重要＞になると述べた。

以上の理由により，≪内省という行為自体が重要≫となる。

6.2.2　≪内省された記録が重要≫

また，両者は，内省は＜忘れないための記録として重要＞であると述べた。竹内曰く，授業中に動いた気持ちというのは揮発性が高い。そのため，授業終了時に自分できちんと時間を作り，自分の気持ちの変化を記録しておくことが重要であると述べていた。また，丸尾は，学生は前回

の授業内容をすぐに忘れるし，「この間の授業楽しかったね」で終わってしまうため，エンターテイメントとして楽しむのではなく，内省によってきちんと考え，記録させることが重要であると考えていた。

さらに，丸尾は，＜学び・成長の記録として重要＞だという点についても述べていた。複数回の授業の内省の記録[13]の変化を見ると，明らかに内容が進化しており，成長の軌跡が見えるし，学生自身も明らかに成長を実感しているという。それは授業期間内に限らない。卒業生が数年後に内省の記録を見直し，「自分の成長が止まっているのを実感しました」と言いに来るなど，一定の効果があると実感しているという。それは内省を記録したからこそ可能になったことである。

以上の理由により，≪内省された記録が重要≫になるという。

6.3　経営学CMにおける内省のための具体的な試み

6.2で述べた内省の重要性をふまえ，授業内で内省をさせるためにどのような試みを行っているかについて，竹内からは2つ，丸尾からは6つの【ラベル】が生成され，3つの＜小カテゴリー＞，2つの≪大カテゴリー≫に集約された。≪内省させるためのしかけ≫≪内省を重要視させるためのしかけ≫という2点に分けて説明していく。

6.3.1　≪内省させるためのしかけ≫

まず，＜考えさせるためのしかけ＞について述べる。丸尾は，クラス討議が180分の授業を担当しており，時間に余裕があるため，授業の終わりに15分ほど内省の時間を取っているという。具体的には，今日獲得できたものと獲得できなかったもの，明日から実践しようと思ったことという3点について5分程度で書かせ，一人1分程度で言わせるという方法である。[14] なお，この記述と授業の初めの記述を合わせたものが1枚のシートとなり，6.2.2で述べた内省の記録となっている。その記録を学期の最後に束ね，苦言と長所を書いて教員のフィードバックとすることも，さらに考えさせるための一つのしかけとなっているといえる。

もしクラス討議が90分の授業の場合は，この活動を行う余裕がないため，4回に1回はCMを行わず，課題を出し，内省の時間にするという。その課題は，3回の各授業の最後に，当日のケースでもう少し掘り下げて考えてほしいという点について与えておいた問いである。そして，その課題について考えることにより，地域や寮などで似たような状況がないかなど，学生自身の生活に引きつけて考えることが可能となる。

一方の竹内は，時間的切迫感のあるCM授業において，教員が伝えたいことを授業の時間いっぱいに詰め込もうとすると内省どころではなくなるため，授業の終わりに数分残し，最後にもう一伸び，内省ができる余裕を残すというしかけについて述べていた。

＜記録させるためのしかけ＞としては，竹内は将来の自分に対する申し送りの手紙を書くよう伝えているという。3年後，5年後の自分に対し，今自分が勉強したこと，思ったこと，そして，時間がなく，次の予習に入らなければならないからこの続きを考えてくれ，これについてどう思うかまた考え直してくれといった内容の手紙を書かせるということである。6.2.2で述べた，揮発性の高い気持ちの動きを記録させるためのしかけである。

以上が，≪内省させるためのしかけ≫となる。

6.3.2　≪内省を重要視させるためのしかけ≫

6.1.2では，内省が評価に入らないために学生が内省を軽視しているという意見があったが，丸尾は，6.3.1で述べた授業の初めと終わりの活動を成績評価に入れることにしているという。内容によって点数を変えるのではなく，提出した時点で一定の点数をあげることにより，内省が重要

であるというメッセージを伝えているということである。

6.4　小括

以上をふまえ，各研究課題への回答を簡潔にまとめる。

まず，経営学CMにおける授業内の内省の排除の理由として一般的に考えられていたのは，時間的制約による運営上の問題，授業内に内省を行う必要性への懐疑，授業内に内省を成し遂げることの難しさであった（研究課題1）。しかし，竹内・丸尾は個人的には内省こそがCM授業の目的である，と内省を重要視しており，内省を記録として残すことも重要であると考えていた（研究課題2）。内省のための具体的な試みとしては，獲得できたことなどをシートに書き，クラスで共有する，将来の自分への申し送りの手紙を書くなど，様々な方法が挙げられた（研究課題3）。

7. 日本語教育版CMにおける内省の扱いへの示唆

以上の分析結果により，日本語教育版CMにおいて，内省をいかに扱えばよいのかという点に関して得られる示唆をまとめる。

7.1 「内省とは何か」の再考

まず，内省の具体的な扱い方を考える前に，「内省とは何か」について再考する必要がある。分析結果からは，近藤，池田，竹内，丸尾の4者が考えている「内省」が必ずしも一致していないということが分かる。それは，範囲のずれであり，深さのずれでもある。

まず，内省の範囲のずれ，つまりどこまでを内省の対象とするのかという点について考えてみよう。**表1**にあるように，近藤（2015c）は，内省シートによって討議の過程における自らの変化を振り返ること，池田（2015）は，個人予習レポートに加筆修正し，討議を通して深まった自分の理解を確認することを内省としている。丸尾が書かせている「今日獲得できたものと獲得できなかったもの」も，同様に討議の振り返りであるが，このほかに，丸尾は，明日から実践しようと思ったことも書かせ，発表させている。これは，ケースで学んだことを自分事として考え，実践し，自分の考え方ややり方を身につけることを重視しているためであると考えられる。ビジネス日本語教育の場合，勤務中もしくは勤務経験のある非母語話者を対象とする場合と，勤務経験がなく，ビジネス場面が身近でない学生などを対象とする場合があり，後者の場合，日常生活にお

表1　4者それぞれによる内省の方法

竹内	3年後，5年後の自分に対して，今自分が勉強したこと，思ったこと，申し送りすることを手紙として書く。
丸尾	（クラス討議180分の場合）今日獲得できたものとできなかったもの，明日から実践しようと思ったことを書いて話す。／（クラス討議 90 分の場合）3回の授業の最後に出された課題について，学生自身の生活に引きつけて考える。
近藤	内容についての気づき，討論を通じて得られた言語・コミュニケーションについての発見，その他の視点を内省シートに書く。
池田	討議を通して深まった自分の理解を確認するために，事前課題であった個人予習レポートに加筆修正する。

ける実践は難しいといえる。しかし，日本語教育版CM，特に筆者の専門とする待遇コミュニケーション[15]の場合，実生活における実践は比較的容易であるため，ケースや授業から離れた実生活を内省の範囲に入れることは可能である。6.1.3で述べられていたように，学生が内省したふりをしたり，教員が学生に内省を誘導することになるのを防ぐためにも，討議を超えて一人ひとりの日常生活における具体的な営みに学びを結び付けさせることは有効であると考えられる。ケース教材はあくまで自己成長のための手段であるため，いかに内省をケースから離れさせ，自分自身に近付けさせるかという点が，重要になってくるといえる。

次に，深さのずれ，つまり内省をどこまで追求するのかという点について考えてみよう。近藤・池田の内省は，竹内の言葉を借りれば「揮発性の高い気持ち」について考えることであり，「解凍・移動・再凍結」でいえば「解凍」もしくは「解凍」から「移動」に進む段階の内省であると考えられる。この内省を学び・成長の記録として残しておくことの重要性は竹内・丸尾も認めている。例えば竹内の提案している自分への申し送りの手紙も，丸尾の言う「今日獲得できたものと獲得できなかったもの」の記述も，この揮発性の高い気持ちの記録を目的としたものである。しかし，竹内は，「解凍・移動・再凍結がすべて終わり，以前の解凍前の自己モデルを懐かしく思い出せるぐらいの時に可能となる」より深い内省を真の内省であると捉えていた。それは，「「はい，じゃあ今から内省の時間ですよ，はいどうぞ！」と促されて10分程度でできるような内省ではない」「内省の価値理解に辿り着ける学生は限られている。だからこそ，内省が重要であり，価値がある」という趣旨の発言からも読み取れる。無論，自己モデルの更新，つまり自己認識及び外界認識の仕方を変える段階に至るまでの過程に，近藤・池田の言うような内省が必要だという意見もあるだろう。しかし，内省とは自己モデルの更新であると定めた場合に，浅い内省を重ねることが最も効果的な方法になるとは限らない。日本語教育版CMにおいては，まず最終目的とする内省の深さを定めることから始め，その後に具体的な方法について考えていかなければならないといえるだろう。

なお，近藤・池田がより深い内省について考えていないというわけではない。例えば，授業後にレポートやエッセイとして「ケース学習を通して得た視点や情報，知識を統合し，自分の意見を加えて書くことで，ケースで扱われている重要な概念や観点を再度整理することができる。」（近藤 2015c，p. 86）と書かれている。しかし，こちらは補助的なものであり，内省として最も重視されているのは，前述した討議の振り返りのほうである。CMの目的を自己モデルの更新による人間形成と設定するならば，振り返りの先にあるより深い内省のほうに重点を置く必要が出てくる。無論，教員が求める内省の深さが深ければ深いほど，内省の扱い方は難しくなる。しかし，日本語教育版CMの開発においては，その問題に積極的に取り組んでいく必要があると考えている。

7.2　内省の具体的な方法の検討

それでは，より広く深い内省を求めるために，具体的に何を行えばよいのか。分析結果から読み取れるのは，日本語教育においては，経営学CMほどの時間的切迫感や時間的制約はないと考えられるため，より自由に内省の方法について検討することが可能だということである。ビジネススクールは，平日の夜や土日に集中して授業を行う形式が主流となっており，時間的制約があった。また，経営リーダーに必要な強靭な精神を鍛えるために時間的切迫感を保つ必要があった。しかし，日本語教育の場合は，機関にもよるが，内省の時間を設けるために調整することは比較的容易であり，このような問題は乗り越えられるといえる。

なお，内省の深さは討議自体の深さにも関連するため，内省の方法のみを修正することはでき

ない。丸尾は通常，クラス討議が180分の授業を担当しており，後半になると自分たちの状況へと自然に論点が移っていくため，内省がなされると述べていた。しかし，日本語教育においては，通常グループ討議は20 ～ 30分，クラス討議は30 ～ 40分程度であるため，討議内で学生自身の問題について話すところまで討議を深めることは難しい。複数回の授業で1ケースを扱うなど，時間配分及び討議の深め方に関して，改めて考える必要があるだろう。

日本語教育における内省の具体的な方法は，前述のように，授業ごとの内省シート（近藤他 2013，近藤他 2019）や個人予習課題への加筆（池田 2015）である。しかし，竹内が述べていたように，一週間に一回，一学期に一回という頻度も検討する必要があるだろう。丸尾も，4回に1回の内省の時間を提案していた。もし4回に1回の内省の時間を設ける場合は，根本的に関連する問題を持つ3つのケースを用いて3回の授業を行った後，その問題について4回目の授業で考えを深めていくという方法も考えられる。また，内省シートやレポートという形式ではなく，竹内が提案していたような，3年後，5年後の自分への手紙という形式のほうが，より自分のための内省という意識が強くなるとも予想される。これらの方法が効果的かという点に関しては，各教育機関の事情やDLの教育理念・方法，学習者の属性や学習環境など，様々な要因が影響する。今後は，実践研究の成果を積み重ねることによって，日本語教育版CMにおける内省の具体的な方法について考察を深めていきたい。

8. おわりに

以上のように，経営学CMにおける授業内の内省の排除，内省の重要性，内省のための具体的な試みという3点に関する経営学CM実践者へのインタビュー結果をもとに，日本語教育版CMにおける内省について考察してきた。本研究の意義は，日本語教育におけるCMのあり方を，経営学CM実践者という，日本語教育の外の視点から検討したという点にある。近藤・池田・竹内・丸尾の4者の内省に対する考え方の相違を明らかにすることにより，内省に対する考察がより深まったといえる。

さらに，CM研究における成果として挙げられるのは，経営学CM関連の文献で公表されていなかった部分を明らかにした点である。経営学CMの理念及び方法を記述した文献は数多くあるが，内省についての記述はほとんどなかった。これは，一般的に実施されていない点について，あえて言及し，その理由を書く必要性がなかったためであると考えられる。そのために，なぜ授業内で内省を行わないのかという点はこれまで明らかにされておらず，「ケースメソッドでは内省が重視されていません。」（近藤 2015c，p. 87）というような誤解を生んでいた。本研究は，日本語教育版CMに関する考察のみならず，経営学CMに関する理解をより深めることにも役立ったといえる。

日本語教育版CMの開発にあたり，今回のように，経営学CMとケース学習を関連付けながら，理想的な形を追究していく作業は，今後も必要になってくるだろう。単に既存のものを受け入れ，継承したり，誤解の上に批判し，修正するというのではなく，一つ一つの検討事項について，継承すべき点とそうでない点を精査に考察し，丁寧に日本語教育版CMを作り上げていきたいと考えている。

注

1）慶應型CMとは，HBSのCMを日本の経済社会風土に合うよう作り替えた，竹内（2010）に代表されるような，日本のCMの草分けとなるものを指す。

2）経営学CMとは，様々な機関において，経営学の分野で実践されているCMを指し，慶應型CM及びそれに改良を加えたものを指す。
3）竹内（2010）では定義付けされていないが，p. 114 ～ p. 121を読む限り，自己モデルとは自己認識及び外界認識の仕方を意味していると推測される。
4）近藤及び池田による内省に関する修正点については，4.2で詳しく述べる。
5）本文には「ディスカッションリードへのフィードバック」と書かれているが，誤植であると考えられるため，「DLからのフィードバック」に修正した。
6）原文は以下の通りである。“In our view, reflection in the context of learning is a generic term for those intellectual and affective activities in which individuals engage to explore their experiences in order to lead to new understandings and appreciations.” (Boud, Keogh and Walker 1985, p. 19)
7）「「今日のケース学習を通じて，新しく知ったことや情報を書いてください。」「話し合いを通じて感じたこと，気づいたこと，思ったことを書いてください。」「その他，感想などを書いてください」といった設問」（近藤 2015c，p.84）が書かれたシート
8）丸尾に，「CMは効果があるから重要だと考えている」という趣旨の発言があったことから，丸尾のインタビューデータに関しては，効果に関連する記述も分析対象とした。
9）2.では竹内（2010）をもとに予習は通常3時間と述べたが，これは一つのCM授業に必要な予習の時間であり，7 ～ 8時間というのは一日に複数のCM授業がある場合の総予習時間を指していると思われる。
10）これは無論，すべての大学に言えることではない。竹内はこの状態を憂慮している。
11）竹内（2010）では，CM授業によって「ビジネスリーダーに必要な“tough mindedness”（知的能力の強靭さ，精神の頑健さ）が自ずと養われる」（竹内2010，p. 31）と述べられており，修羅場に耐えうる精神的な強さが求められているといえる。
12）6.3.1で詳しく述べる。
13）6.3.1で詳しく述べる。
14）授業の初めにも同様に15分程度時間を取り，前回の授業の振り返り，これまでの授業をふまえて実践したことの報告，当日の意気込みという3点のうち，話したいことをまず5分で書かせ，一人ずつ言ってもらっているが，内省につながるのは授業の終わりの活動のほうであろうと述べていた。
15）コミュニケーション行為をコミュニケーション主体が認識する場面に重点を置いて捉えたもの（蒲谷 2013）

参考文献

浅津嘉之（2019）記述式ルーブリックを使った思考の可視化による内省の深まり　関西学院大学日本語教育センター紀要 08，関西学院大学日本語教育センター，35-49.

アドゥアヨム・アヘゴ希佳子・鈴木綾乃（2022）より深い討議・学びを目指した「ケースメソッド」とは——経営能力の育成を目指す慶應型ケースメソッドとの比較から　日本語教育方法研究会誌 28 (2)，32-33.

池田玲子（2015）経営学ケースメソッドからビジネスのための日本語教育へ——ピア・ラーニングによる授業デザインの提案　近藤彩編著　金　孝卿・池田玲子著　ビジネスコミュニケーションのためのケース学習——職場のダイバーシティで学び合う【解説編】第2章，15-43.

池田玲子・舘岡洋子（2007）ピア・ラーニング入門——創造的な学びのデザインのために　ひつじ書房.

梅津光弘（1997）ケース・メソッドによる授業の理論と実際——中・上級日本語教育への応用可能性　日本語と日本語教育，25，103-115.

蒲谷　宏（2013）待遇コミュニケーション論　大修館書店.

萱間真美（2007）質的研究実践ノート　医学書院.

金　志宣（2019）内省シートを活用した内省活動の効果——日本語教育における自律的学習の支援の観点から　日本語教育研究49，5-21.

金　孝卿（2008）第二言語としての日本語教室における「ピア内省」活動の研究　ひつじ書房.

金　孝卿・近藤　彩・池田玲子（2020）日本人も外国人も ケース学習で学ぼう ビジネスコミュニケーショ

ン　日経HR.
近藤　彩（2014）日本語非母語話者と母語話者が学びあうビジネスコミュニケーション教育――ダイバーシティの中で活躍できる人材の育成に向けて　専門日本語教育研究16，15-22.
近藤　彩編著（2015a）金　孝卿・池田玲子著　ビジネスコミュニケーションのためのケース学習――職場のダイバーシティで学び合う【解説編】ココ出版.
近藤　彩（2015b）ケース学習とは何か？　近藤　彩編著　金　孝卿・池田玲子著　ビジネスコミュニケーションのためのケース学習――職場のダイバーシティで学び合う【解説編】第1章，1-14.
近藤　彩（2015c）実践！ケース学習の流れ　近藤　彩編著　金　孝卿・池田玲子著　ビジネスコミュニケーションのためのケース学習――職場のダイバーシティで学び合う【解説編】第4章，77-100.
近藤　彩・金　孝卿（2010）「ケース活動」における学びの実態――ビジネス上のコンフリクトの教材化に向けて　日本言語文化研究会論集6，15-31.
近藤　彩・金　孝卿（2014）グローバル時代における日本語教育――プロセスとケースで学ぶビジネスコミュニケーション　National Symposium on Japanese Language Education 2012, 103-115.
近藤　彩・金　孝卿・池田玲子（2019）ビジネスコミュニケーションのためのケース学習――職場のダイバーシティで学び合う【教材編2】ココ出版.
近藤　彩・金　孝卿・ムグダ ヤルディー・福永由佳・池田玲子（2013）ビジネスコミュニケーションのためのケース学習――職場のダイバーシティで学び合う【教材編】ココ出版.
戈木クレイグヒル滋子（2005）質的研究方法ゼミナール――グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ　医学書院.
竹内伸一（2010）ケースメソッド教授法入門　理論・技法・演習・ココロ　髙木晴夫監修　慶應義塾大学出版会.
竹内伸一（2013）ケースメソッド教育の実践を支える組織的サポートに関する研究――ハーバード・ビジネス・スクールと慶應義塾大学ビジネス・スクールの事例から　広島大学大学院教育学研究科紀要第三部62，69-78.
髙木晴夫・竹内伸一（2006）実践！日本型ケースメソッド教育――企業力を鍛える組織学習装置　ダイヤモンド社.
宮﨑七湖編著（2014）江後千香子・武　一美・田中敦子・中山由佳・村上まさみ著　留学生のためのケースで学ぶ日本語――問題発見解決能力を伸ばす　ココ出版.
ルイス・B・バーンズ，C・ローランド・クリステンセン，アビー・J・ハンセン編著（2010）ケース・メソッド教授法　ダイヤモンド社.
Boud, D., Keogh, R. and Walker, D. (1985) *Reflection: turning experience into learning*. London: Routledge.
Lewin, K. (1952) *Field theory in social science: selected theoretical papers*. London: Tavistock.

付　記

本研究は，文部科学省科学研究費若手研究「スピーチレベル観育成のためのケース教材の作成」（課題番号21K13040，研究代表者アドゥアヨム・アヘゴ希佳子）の研究成果の一部である。

執筆者紹介（掲載順）

吉田量彦	商学部	教授	哲学，倫理学，思想史
水野厚志	言語コミュニケーション学部	准教授	中国思想･哲学，中国語教育
ｱﾄﾞｩｱﾖﾑ･ｱﾍﾞｺﾞ 希佳子	宝塚大学東京メディア芸術学部	専任講師	日本語教育学

編　集　後　記

『人文・社会学研究』第７号が発行されました。今号には３本の学術論文が掲載されております。ご多忙のなか，査読審査にあたってくださった方々には深く感謝いたします。次号の締め切りは９月30日です。多数の投稿があることを期待します。

（編集担当）

東京国際大学論叢　人文・社会学研究　第７号 2022（令和４）年３月20日発行

［非　売　品］

編　集　者　東京国際大学人文・社会学研究論叢編集委員

発　行　者　塩　澤　修　平

発　行　所　〒350-1197　埼玉県川越市的場北1-13-1
TEL　（０４９）２３２－１１１１
FAX　（０４９）２３２－４８２９

印　刷　所　株式会社　東　京　プ　レ　ス
〒161-0033 東京都新宿区下落合3-12-18 3F

THE JOURNAL OF TOKYO INTERNATIONAL UNIVERSITY

Humanities and Sociology

No. 7

Articles

The Complainant Against Liberticide
How did *Tractatus Theologico-politicus* Interest the
English Poet Percy Bysshe Shelley? ····· YOSHIDA, Kazuhiko

Guo Xiang's Introduction of Zhuangzi Coming After "Tianxia" ·····MIZUNO, Atsushi

What Does Reflection Mean to Case Method Instructors on
Management Studies?: Aiming to Develop the Case Method for
Japanese Language Education ····· ADUAYOM-AHEGO, Kiyoko

---

2 0 2 2